

### 第三章 地域うたごえ運動の展開 －仙台合唱団の歴史を中心に－

#### はじめに

日本のうたごえ運動については、中央合唱団をはじめとする日本のうたごえ全国協議会の中心的活動家や運動に関わった音楽の専門家の手によって、これまでいくつかの「運動史」がまとめられている。全国的な運動を代表するこれらの人々によって著されたものは、その時々的情勢にあわせた啓蒙書であり、運動の歴史的教訓を学ぶことによって、現実の運動を前進させていくために重要な指針となっていたものである。

うたごえ運動の歴史がまとめられて刊行された最初の代表的なものとしては、雑誌『知性』のうたごえ運動特集増刊号（河出書房、1956年3月号）が知られている。ここでは、社会的現象ともいわれた運動創生期の状況が示されているが、音楽センター芸術局が編集した1955年までの年表が運動の歩みとして掲載されている。また60年代の後半より、当時日本のうたごえ実行委員会事務局長であった中央合唱団1期生の藤本洋の手によって、うたごえ新聞に中央合唱団の20年の歩みが4年間にわたって連載された。それは『歌はたたかいとともに』（音楽センター出版、1971年）という著書にまとめられて出版され、うたごえ運動の歴史として1960年までが示されている。また同氏は、その後もうたごえ新聞に書き続けたものを30周年記念として『うたは闘いとともに』（音楽センター出版、1980年）に著し、1970年までがまとめられている。同時に井上頼豊の編によって『うたごえよ翼ひろげて』（新日本出版社、1978年）が1978年までのあゆみがまとめられている。40周年に際しては、音楽センター社長の浜中雄二を代表として記念写真集『うたごえは平和の力』（40周年記念委員会編、音楽センター出版、1988）が発行され、1988年までの年表が写真の解説とともに添えられている。このほか、自己の体験を語った運動家のものとしては、林学『大須っ子』、宝木実『レジスタンスの青春』、日野三郎『レールよ高らかにうたえ』、浜島康弘・小林一二『ぼくの歌きいてよ』などがある。第三者がまとめたものとしては、作詞家森田ヤエ子の『この勝利ひびけとどろけ－荒木栄の生涯』、神谷国善『荒木栄の歌と生涯』、小説家佐藤貴美子の『母さんの樹』などがある。

音楽的専門家のものとしては、運動の創始者であり理論的・実践的指導者であった関鑑子の著作『歌ごえに魅せられて』（音楽センター出版、1971）や、その追想集『大きな紅ばら』（関鑑子追想集編集委員会編、音楽センター出版、1981）があり、運動の指導者が目指していたものが歴史を追って示されている。関鑑子の死後、専門家として中心的指導者となっていた井上頼豊は、『うたごえ運動の創造・展望』（うたごえ新聞社発行、1991）を運動のテキストとしてまとめ、80年代までの歴史と課題を総括している。また、自らの歩みに関しては、『聞き書き井上頼豊』（音楽之友社、1996）においてかなり率直な意見を語っている。

以上のような形で著された運動の歩み・歴史は、それぞれの立場があるとはいえ、うたごえ運動の全体像を示す上で貴重な資料となるものである。しかるに、歴史をまとめるという作業は「この運動のもっともおくれた分野」（『愛知のうたごえ40年の歩み』愛知のうたごえ四十年史編纂委員会編、1988、における井上頼豊の手記より）であることは以前から指摘されていたことである。さらに、「実像が息づいているはずの各地のうたごえ運動の歴史となると、今まではせいぜい総会討議資料的な簡単なもの」（同）しかないという現状であり、愛知のうたごえの40年史の刊行が特筆されるくらいで、運動における教育の重要性が指摘されているにも関わらず、手が着けられていないといってもよいのが事実である。地域のうたごえ運動史をまとめるという作業は、実際の活動家にとってみるとまとめづらいものであるのか、それとも過去を振り返る余裕などがない（未来に向けた）運動をやっているのか、うたごえ運動の現実を示す一例である。

実像として存在する地域での運動が整理されないでいると、うたごえ運動の実態は中央の運動－中央合唱団や日本のうたごえ全国協議会、日本のうたごえ祭典の運動など－でもって語られることにならざるをえない。それはそれで意味のあることではあるが、全体の正確な実態を示しているとはいえず、運動自体の展望や課題をみいだす上では不十分であるそしりをまぬがれ得ない。特に、運動が逆風にあったり停滞したりする場合、以上のことは運動自体にとっても自覚されざるを得ない課題となろう。

日本のうたごえ運動の初期（50年代）にみられたような、未熟さゆえの混乱ではなくて、運動の「停滞現象」の現れが指摘されるようになったのは、60年代の後半～70年代初頭のことである。日本の数多くの大衆にとって、自分たちの歌がなかったゆえに「うたごえ」を求めていた時代は終わりを告げ、日本が世界の「音楽市場」として驚異的な成長を遂げ、その影響が国民生活に影響を見せ始めたといわれた時期である。テレビ、ラジオ、音楽機器の普及は言うに及ばず、演歌、軽音楽、フォーク、ロックなど大衆音楽の大きな変化の中で、うたごえ自身が大きく変わらざるを得ない状況が作り出されたことである。またそれは文化状況だけではなくて、政治状況としても、「70年安保」や革新自治体の全国的な広がりによって代表されるような国勢革新のうねりを作り出した一方、それに対する反動化が現れてきた時代でもあった。

1973年5月には、運動の創始者でもあり全国的運動の理論的・実践的支柱であった関鑑子が死去する。運動自体は個人的なものではないにせよ、時には運動の「閉鎖性」や「独裁性」（『聞き書き井上頼豊』より）の象徴にもされた存在であったが、いわば芸術的よりどころとしての運動のシンボルでもあり、多元的、多面的運動の統一・団結のシンボルがなくなったということは重大な事態でもあった。うたごえ運動はそれまでの歴史の本格的な総括が求められた。1973年6月に、運動の統一的全国組織であった「日本のうたごえ実行委員会」は規約を改正し、「日本のうたごえ全国協議会」と名称を変更する事によって、恒常的に運動を進める協議体組織となっていく。新名称で初めて開かれた日本のうたごえ全国協議会第7回総会（1974年2月）は、運動における「狭さ」や偏った傾向を改めた方針を採択し、新たな画期をつくりだしていっ

た。それは「運動の大衆化・現代化」といわれているものであるが、次のような9項目の課題を打ち出すことによって、新たな発展を目指したものである。①普及する曲目の選曲の幅を広げる、②普及する対象を広げる、③サークル員、サークル数を増やす、④専門音楽家、他団体との協力、協同の強化、⑤他の文化サークルとの協力、⑥世代を越えた活動家の団結、⑦日本のうたごえ祭典の成功、⑧みんなうたう会活動の推進、⑨学習活動の強化。

この方針の基本的な中身は現在まで変わっていない。70年代の後半以降といえ、日本資本主義の高度経済成長が終わりを告げ、低成長の時代である。不況、合理化、倒産、失業者の増大という傾向は確かに現在まで長く続いており、社会的な状況としては連続しているといえよう。こうした中においては、労働者を中心として運動に参加する青年層も大きく影響を受けざるを得ないし、「歌など歌ってられない」ような、ますます深刻さを増している状況であったともいえる。一方では運動を意識しなくても「気軽に」歌が歌えるカラオケや音楽産業の隆盛もあり、手間暇をかけて人々を歌に組織するうたごえ運動にとっては、より大きな困難が現れた時期といってもいいであろう。「停滞現象」がいわれた時期に準備され大きく転換された「大衆化・現代化」の方針は、その後、80年代に現れた戦後第2の反動期の中で実践に移されていったのである。

こうした経緯の中で、地域のうたごえ運動はどのような活動の展開を見せていったのか。とりわけ、「停滞現象」の克服のためにどのような営みを展開していったのか。運動の実像を明らかにするということは以上のような分析を必要とすることは疑いえない。結論的にいえば、運動が前進した地域もあれば後退した地域もあるというのが実態である。本研究が事例とする仙台合唱団（及び宮城のうたごえ運動）も、地域のうたごえ運動を示す代表例とか典型例とはいえないだろう。筆者が参与観察、ないしはアクションリサーチを続けたという以外は取り上げる必然的根拠は存在しないかもしれない。しかし、どの地域をとっても「特殊な」事例であるといえるが、この対象は次のような条件を満たしている以上、それはうたごえ運動における「普通の」事例足りうると思われる。

一つは、中央合唱団に代表される日本のうたごえ運動によって組織化の対象とされ、それによって育てられてきた合唱団であること。そして、地域における中心合唱団（センター合唱団）としての性格を持っており、地域（この場合宮城県や東北に対して）の運動を代表し運動の組織化を担う位置と役割を与えられていることである。二つ目は、70年代初めの運動の転換（発展）の中で、日本のうたごえ全国協議会に団結し、その構成メンバーとして方針を実践していったという団体であることである。全国的な文化状況、政治状況はまさに一様であって、宮城県や東北がその特殊的な現れであったとしても、全国的な課題の中で運動を展開していったということである。仙台合唱団（及び宮城のうたごえ）は以上の条件に当てはまっており、「独自の運動」として存在していったものではない。運動が前進しているか後退しているかは事例を選び出す根拠とはならない。仙台、宮城県においては、運動の先進地域といわれてきた大阪、京

都、名古屋、三多摩などの地域と比べて、特殊な地域的条件を持っていただけであって、運動上の性格としては同じものとして認められるのである。

一般的に言えば、運動が前進してきたのか後退したのかを歴史的に検証するという作業は次の三つの検討が必要である。一つは、運動の方針自体が正しかったのかどうかの検討である。これは全国的な運動の分析であり、地域が直接関係はしてこない性格のものである。二つ目は、方針自体が正しいとしても、その方針通りに実践されていたのかされなかったのか、されなかったとすればその理由、条件は何かということである。この点においては、まさに地域的条件が問題とされ、地域を通した分析枠組みを必要とすることになる。この点の検討においては、対象への発達論的なアプローチを必要とする。すなわち、対象を発達するものとしてとらえるという方法であるが、これを検討する際には人間形成における次の指摘が参考になる。すなわち、具体的な地域において人間形成を受ける諸個人にとっては（これは集団を対象としてもも当てはまると考えられる。）、「人間形成における特殊性（個性）と人格内容における普遍性とを兼有しうするためには、その地域は、教育形態においては地域性を保持するが、教育内容においては地域性を克服しなければならない」ことが重要であるからである。「地域的＝特殊な教育形態は、全国的な教育内容への抽象化＝普遍化による検討を経て、その発現様式を積極的に規定されるのであり、また全国的＝普遍的な教育内容は、地域的な教育形態への具体化＝特殊化による検討を経てその発展方向を積極的に規定される」（那須野隆一「国民教育と生涯教育」『現代と思想』第17号 1974）関係がある。全国的状況の下での運動方針は、「地域的形態」の検討を経て発展するということであり、地域的諸条件を無視しては方針は展開しないということである。そのことから三つ目の問題として、運動における地域的な意義や課題を対象自体がどのように見いだしていたのか、言葉を換えれば地域的な実践形態（教育形態）をどのように保持していたのか問われなければならない。

地域のうたごえ運動を検討対象にするという場合は、上記の第2点目、3点目が中心課題となることはもちろんであるが、1点目の課題は全く問題外というわけでもない。1点目の課題とは、全国的な運動の分析課題であるとしても、なにをもって「運動の前進」といい、また逆に「停滞現象」の原因とみたのかということとは、分析枠組みの基本に関わる事項でもあるからである。運動内部での分析は、すでに民主的な手続きの中で総括として表されているので、それをそっくり分析枠組みにすると、運動が述べている「歴史」と同じものができあがってしまうという「弱点」を持っている。そこで、それとは別に「客観的」立場から分析しようとした研究のレベルでの把握が必要であろう。このことに関連して研究者による成果は少ないが、社会教育の研究者である長浜功の指摘があるので参考にするにすることにする。同氏は、まさに「運動の停滞現象」が現れた時期に論文（「大衆における自己形成の思想」北海道大学教育学部紀要第18号、1971）を著したが、そこで70年代の時期のうたごえ運動の（サークル運動としての）課題を述べている。

この論文によると、うたごえ運動は自然発生的に成立してきたものではなく、戦前

のプロレタリア文化運動の流れを汲み、戦後においても日本共産党の再建によって出された「文化サークルの組織方針」（1945.12）にみられたように、計画的に見通された文化政策が存在していたことがまず述べられている。にもかかわらず、従来の少数者の引き回しというサークルの公式を打ち破り、新しいサークルの方向を目指していたと大きく評価している。（レッドパージによる活動家の追放がさほど影響をしていないのはこの証左である。）つまり、無目的、無性画ではなく、文化運動としての質を持っていたという側面と同時に、政党や組合から独立し大衆のプリミティブな生活実感を基軸にしたからこそ、広範な支持を得たという分析を行い、そのことの意義を重視している。

ところが、他のサークル運動と同様60年代前半には、量的な意味においては「停滞期」を迎え、ジャーナリズムやコマーシャルリズムからの姿を消し始め、支配階級からの干渉や攻撃（官製うたごえ運動や職場における活動の締め付け等）を受けたばかりか、サークル理論としても対立（日本音楽家協会などとの分裂や一部労働組合との対立等）が始まったとされる。しかしそれは、運動や理論における「停滞」ではなく、政党や労働組合の届かない大衆の中に根を下ろすというサークル本来の姿が始まったということであり、ブルジョア民主主義の実現というサークルの目標がある限界に達した点での質的な転換を目指している時期であったと評価される。そして60年代後半以降は、没価値的親睦サークルの群生の中で、「たたかうサークル」にとっては政党や労働組合に定着化しいかに量的拡大をはかるのか（いかにして広範な大衆との結合をはかるか）ということが課題とされ、そのためにはサークルの原理的内在的分析が必要になってきた時期であると指摘している。

すなわち、運動の「停滞現象」＝一部はマスコミに流れ商業化の道をたどり、一部はうたごえ喫茶での憂さ晴らしというタコ壺化の道をたどっているということの克服のためには、攻撃や分裂に理由を求めるだけではなくサークルそのものについての検討が必要であるということである。それは、歌による自己主張という運動そのものが、民衆の生活実感をよりどころとしていたからこそ、感性的認識から理性的認識への道、言い換えれば生活実感から「歴史化的現実認識」（上原専禄）への道へと進める課題が発達論的に存在しているが、それが達成できないでいることを問題にしているのである。これはまさに、サークルにおける教育＝学習の問題でもある。そして、うたごえ運動における学習の本質問題として以上のことを検討した場合、「生活実感－文化要求、日常性のレベルと歴史化的現実認識－価値選択水準、政治的水準とは相容れないものなのかどうか、という難問をうたごえ運動は解決できなかった。」と長浜は結論づけているのである。その原因としては、両者をつなぐ媒介原理を運動そのものが見いだせなかったことを指摘しているが、これは主として運動を進めている大衆の側に責任があり、文化的退廃攻撃の中でも矛盾が怒りに転化しないことや、運動がそれらのメカニズムも解明できていないという評価を下したのである。

ここで述べられている「大衆の側」とは、サークルの理論家ではなく、実像として存在している地域のサークルで活動している側の人々のことである。地域のうたごえ

運動を対象にするということは、長浜のいう「大衆の側」を問題にすることにほかならない。本研究の課題は、長浜の指摘が正しいものであるのかを仮説として実証するというわけではないが、地域においてサークル的基盤の中で活動している集団を教育＝学習活動を通して分析する上での課題として受け止めることとする。

その際に問われるものは、70年代以降の地域のサークル（合唱団）では長浜の以上の指摘を受け入れる基盤が存在していたのかどうかであると同時に、「運動（サークル）が解決できなかった」のかそれとも「運動を担っていた個人が解決できなかったのか」ということである。うたごえ運動が民主的なサークル運動であるならば、個人をシンボルとした運動からは脱却する過程があり、その流れの中でサークルとしても発展してきたはずである。（中央合唱団における民青からの独立、関鑑子死後の日本のうたごえ全国協議会の結成など）そうした大きな流れでみた歴史的発展と、具体的サークルにおけるの歩みの整合性が問題になる。また、70年代はいざ知らず、50年近くにもわたる運動になってくると、そこには個人（特にリーダー層）の世代交代がはかられることは必至である。「専従」という言葉に代表されるような、人生をうたごえ運動にかけた生活をする活動家と、自己の発達（変革）や成長の糧としてうたごえに飛び込んできた青年は同じように論じることはいできない。様々な要求、関わりかたで集まった成員（青年が中心ではあるが青年ばかりではない）が様々な成長の姿を見ているのが具体的なサークルの実態である。一方では「専従」になろうとする青年もあり、一方では1年未満でやめて他の道を目指す青年もある。こうしたサークルの構造を理解しないと長浜の指摘は当たらない。全国的なものとして語られるのとは違って、地域のうたごえ運動の歴史をとらえるとは、サークル自体の展開と同時に比較的長くサークルをやめずに活動した「人物」の歴史としてとらえられるともいえよう。いわば、「サークル構造の展開史」と「人物史」の両面の分析が必要ということである。集団を通した個人の発達（長浜の指摘で言えば生活実感から歴史化的現実認識への発展）ではなくて、集団の発達（歴史）自体を問う場合にはこの両側面を問題にする必要があり、運動自体が地域で実証されなければならない根拠になっていると考える。うたごえ運動50年ということは、どの程度「人物」から独立した運動（集団）になっているかがやっととらえられるくらいの期間を持ったということではないだろうか。

以下の記述は、仙台合唱団を中心とした宮城のうたごえの歩みを、前史から東北音楽センター創設までにわたって5期に分けて整理してみたものである。運動の画期をもって分けてあるが、「人物史」が中心であることは否めない。しかし、リーダー層を代表として担われた歴史でありながら、50年近くにわたっての運動は着実にサークルの構造、運動の構造を変革したものとなっている。こうした歴史の整理が、運動が抱える困難や「停滞現象」を克服する課題の一助になれば幸いである。

\*なお文中は敬称を略する。仙台合唱団団員は普段団内で使われているサークルネームを用いているが、たとえば「〇〇ちゃん」と呼ばれている場合は「〇〇」だけを記している。

## 第1節 中心合唱団への歩み

### 1. 前史－青共文工隊どんぐり座発足から正史による仙台合唱団の創立まで

1948.9～1953.4      1期生

日本のうたごえ運動の歴史は中央合唱団の結成から始まったとされている。敗戦後の日本の中でわき上がった革新的な青年運動や、職場、地域での新生日本の方向を目指す闘いの中から様々な文化要求、音楽要求が芽生え、その文化運動を代表する形で東京に中央合唱団が創立されていった。しかし、それは自然発生的に生まれたのではなく、戦前の共産主義青年同盟の伝統を受け継いだ青年共産同盟（青共＝46.2結成）や、プロレタリア文化運動の流れを汲む民主主義文化連盟（文連＝46.5結成）の組織があり、その背景には再建された日本共産党による「文化サークル組織方針」（45.12）という計画的に見通された文化政策があったことは、今や常識的理解である。青共の組織拡大のために様々な青年行動隊・文化工作隊が組織されたが、中央に全国の運動を指導する合唱団を建設することが目的とされ、文連の音楽責任者であった関鑑子を指導者として迎え「青共中央コーラス隊」が発足、青共創立2周年文化集会で「青共中央合唱団」として登場した。この時をもって中央合唱団の創立とされている。（48.2）

中央合唱団は、関鑑子を学院長とした青共中央音楽院を設立し研究生の養成を始めると同時に（48.7）、その年の8月に第1回関西・東海公演を行い、関西合唱団、名古屋合唱団、京都ひまわり合唱団、神戸合唱団など現在まで活動を続けている地域の中心合唱団を組織していった。11月からは北海道、東北、関西、中国、九州に常任活動家のオルグを開始し、その流れの中で仙台にも青共の合唱団ができる。

当時の宮城県内の状況は、1945年12月に日本社会党宮城県連合会と日本共産党宮城地方委員会が早くも組織されたのをはじめ、労働組合も日本労働総同盟宮城県連合会（総同盟県連＝45.12結成）や宮城県地方労働組合協議会（労協＝産別系、46.2結成）が結成されており、46年2月には労働戦線統一を目指す宮城地方労働組合会議（組合会議＝県下80の全組合参加）が生まれていた。組合会議は2.1スト及び労働戦線統一を目指す宮城地区労働組合共同闘争委員会（宮城地闘）へと組織を変え、47年2月には宮城県労働組合合同協議会（合同労協）へと発展していった。しかし、2.1スト禁止の情勢変化の中で、48年5月には産別民主化同盟宮城県支部が結成され総同盟、電産、国労仙台支部など10組合が脱退し、仙台地方労働組合協議会（仙台地方労協＝48.12結成）に結びつく労働戦線の分裂が始まりつつある状況もあった。

2.1スト以降の情勢は、日本共産党や労組青年部で活動していた青共においても路線上の混乱をもたらしていた。47年には4万人の同盟員を数えていた青共も、青年層の中では孤立が始まっていた。このような状況の中で、中央からのオルグによって作られた仙台の青共合唱団の「創立」は時期的にも不明であるが、合唱団というよりも青

共の文工隊といった性格が強く、「どんぐり座」と名のって活動が行われていた。歌とダンスを中心とした青共の班づくりの工作隊といった性格のもので、歌集の普及などを主に行った。創立時には、谷宏（仙台高等工業専門学校学生）、佐々木一司（青共地区委員）、扇谷くに（宮城学院学生）、伊藤辰雄（全建労専従、後中央合唱団第3期生へ転出）、神谷一（借地借家人組合）などのほか東北大、宮城学院、女子師範、宮城師範学生などを中心とした10数人のメンバーであった。職場としての拠点は電産（配電、日発）が大きなものであった。団事務所は青共事務所があった元寺小路の朝鮮総連事務所に間借りし、後に白百合学園北門の地に移ったが、この事務所はレッスン場もかねていた。

青共はその後民主主義学生同盟、全日本民主青年同盟等他の青年組織と合流し新しい組織を作る方向を打ち出し、51年5月に日本民主青年団となっていった。青共から民青团への組織移行に際して宮城県内でも合同大会（準備会＝49.4）がもたれ、全民青から代表で参加した斎藤亀一郎（逓信省、後49.8に定員法で減首）が文化部責任者として加わる。その後佐々木が民青中央常任委員となり中央の仕事が中心となったので、谷（当時は中央合唱団に転出した伊藤の後をうけ全建労専従）が合唱団の責任者となる。49年7月の中央合唱団1周年記念音楽会の翌日第1回全国合唱団団長会議が開かれ（中心合唱団代表20名参加）、うたごえ運動の全国的統一の方向が示されるが、そこには仙台からも参加している。（参加者不明）49年10月には中央合唱団も民青中央合唱団と名称を変更し機関誌「うたごえ」を全国に向けて発行した。これが「うたごえ」の名称の始まりとなっている。これを受けて「民青仙台合唱団」を名のるが、50年11月に中央合唱団が民青团より独立する方針を持つと、同様に全国一斉方針により民青の名前をとり「仙台合唱団」となっていった。

しかし、名称は変わっても実質は文工隊活動であり、レッドパージ等の情勢の中、1952年頃まで数間年合唱団活動としては停滞したままであった。この間中央では全国から250万円に及ぶカンパを集め音楽センター会館を完成させた。このことにより全国の運動のセンターを作り出していったが、歌集を始めうたごえの音楽出版物などを取り扱う場所を各地に開設した。仙台でも「東北音楽センター」が51年7月頃田町借地借家人組合事務所内に創設され、谷が専従となる。（全建労東北総支部専従は斎藤と交代したが、専従といっても給料が出たわけではなかった。）

合唱団活動の停滞後、佐々木、谷、斎藤（三羽がらすと呼ばれた。）が中心になって独自の機関紙「うたごえ」（歌集の内容で4号まで5号からは新聞形式の機関紙－3号は民青仙台合唱団発行となっている）を発行するなど、再建活動を展開する。51年7月に東京で開かれた第5回世界青年平和友好祭に呼応した平和合唱祭において、うたごえ祭典を全国的に開く方向が打ち出された。「うたごえは平和の力」というスローガンが確認され、「若者よ」が全国的に大流行する中で、中央合唱団4周年記念音楽会でもあった「1952年日本のうたごえ」に宮城から5名（仙台合唱団2名、東北大1名、坂病院・全建労2名）が参加し運動のいぶきを伝えていった。翌日から2日間開催された第2回全国合唱団会議ではうたごえ運動の大衆路線が確認され、谷は常任幹事となる。



1953年から壇上さわえ（中央合唱団1期生）がオルグに入り、合唱団の組織化は大きく前進する。合唱団事務所を北三番丁全建労東北総支部内におき（53.1）斎藤が責任者となり、一部5円で売る機関紙が定期的に発行された。（その後、組合内で他団体は出ていったほうがいいという意見が出て、田町借地借家人組合事務所へ移転。54.4頃）「仙台合唱団」を名のって大衆的に舞台に上がったのは、53年1月映画「白毛女」上映会での歌唱指導（「シアールの歌」「心の歌」）であるという記録がある。また職場にも積極的にオルグ活動を展開し、最初の創作曲「仙台ゴムの歌」（仙台ゴム労働者詩）を作っているが、実際は「ハワイ・マレー沖海戦」の替え歌であった。そのほか地域に対しては、東北合唱団連盟合唱祭（53.6）に塩釜汐風合唱団（52.9坂病院等が中心となって結成）有志とともに全員合唱に参加、平和と友好のための音楽の集い（53.8）にも出演している。8月には関東のうたごえに仙台合同合唱団として出場、7名を派遣している。また、県内の米軍基地撤去の課題を中心とした反戦平和の大集会である大平和祭（宮城軍事基地反対期成同盟、県労評主催＝53.8）では構成戯曲「平和のうたごえ」を発表し、谷が指揮をして100名の合唱隊を組織している。この間中央合唱団からは小野光子、渡辺昌子が指導のために来仙した。

合唱団としての体裁を持つまでになってきた仙台合唱団は、49年8月に引き起こされた松川事件の裁判に際して、特に公正判決を要求する東北地方での松川裁判闘争支援の運動に参加していった。53年10月に合唱団としては作詞作曲の創作曲第1号となる「真実の勝利のために」（「20人を救え」改題）をつくりだした。作曲の中心は佐々木であったが、裁判所でブラスバンドを指導していた長谷峯治が補作した。曲の公表に際して合唱団の創設を明記することが必要となったという事情があり、正式な「合唱団」の形式を整えるということになり、綱領、規約を決定するための討議が行われ、53年4月創立とする正史がさかのぼって作られることとなった。初代団長は谷宏ということになる。

#### 谷 宏 1期生

- 48. 9 青共仙台合唱団（どんぐり座）創立に参加（仙台高等工業専門学校学生）
- 49. 7 第1回全国合唱団団長会議
- 49 佐々木が民青中央専従になったため合唱団の責任者になる（県庁組合専従→全建労専従）
- 51. 7 東北音楽センターが作られ専従（給料なし）
- 52. 12 「1952年日本のうたごえ」に参加
  - 第2回全国合唱団会議 日本のうたごえ実行委員会常任幹事となる
- 53. 2 「仙台ゴムの歌」集団創作（仙台合唱団創作曲第1号）
- 53. 8 大平和祭構成組曲「平和のうたごえ」指揮
- 53. 10 綱領規約を確定（時期不明）し、主宰者（団代表）となる
- 53. 11 日本のうたごえ祭典に仙台合同合唱団として初参加、指揮
- 54. 6 仙台合唱団の初代常任となり、東北合唱団会議等をリード

- 55. 7 六全協後壇上と論争 うたごえの一線から退くようになる
- 55. 8 仙台労音結成に参加 「手古奈」上演
- 56. 2 活動困難になり常任をやめる 仙台合唱団顧問となる  
中華料理店経営 トロイカ経営
- 58. 6 日うた全国常任を志子田と交代
- 58.11 宮うた祭典実行委員長
- 58.12 国鉄祭典実行委員会委員
- 59. 6 宮城県合唱サークル協議会第2回総会で副会長となる
- 59. 7 中尾さんを送る夕べ発起人
- 60. 8 仙台うたごえ協議会結成し個人加盟
- 60.10 宮うた祭典実行委員長
- 61. 9 宮うた祭典実行委員長
- 62. 6 仙台合唱団を励ます会発起人
- 62. 6 仙台合唱団第1回演奏会実行委員
- 63. 9 宮うた10周年記念祭典実行委員長

#### 佐々木一司 1期生

- 48. 9 青共文工隊どんぐり座創立に参加（青共地区委員）
- 49.10 民青团中央常任委員になる
- 52.12 「1952年日本のうたごえ」に参加
- 53.10 「真実の勝利のために」を中心になって作曲
- 53.11 日うた祭典で伴奏  
その後中央に転出
- 56. 4 受験勉強し東北大医学部に入学  
その後再び民青専従になり中退

#### 大泉 房→沼波 1期生

- 53. 4 入団（二女高生）  
合唱指導など音楽的にリード
- 55. 2 財政部長となる
- 55. 4 高校卒業後合唱団常任となる
- 56. 2 合唱団常任をやめる
- 58. 3 再建時の新委員会で財政と技術部を担当
- 59. 4 常任委員となり財政部担当
- 59. 7 国鉄祭典地元合同のうたごえで指揮
- 59. 8 総会に際して財政白書製作（第2次も）
- 60. 3 6期生教育担当
- 60. 4 宮うた実行委員会事務局

- 60. 4 結婚退職後、再び常任活動家となる  
    安保闘争にうたごえ行動隊として参加
- 60. 6 第1回団活動家会議を自宅で開催
- 60.10 宮うた祭典常任実行委員、事務局長
- 60.10 7期生教育担当
- 61. 5 出産のため11月まで休団
- 61.12 複団し総会で芸術局員
- 62. 2 総会で書記長になる（芸術局員、財政部員）
- 62. 3 労音民謡教室参加
- 62. 6 第1回演奏会実行委員 企画、指揮
- 62.12 日うた祭典合唱発表会指揮
- 63. 2 総会で副委員長
- 63. 5 全国教育活動者講習会参加
- 63. 7 宮うた祭典実行委員
- 64. 1 総会で副委員長
- 66.12 教育担当の委員として復帰
- 67. 7 臨時総会で委員
- 69. 4 第2回演奏会に参加  
    その後活動困難となる
- 71. 5 退団

#### 斎藤亀一郎 1期生

- 49. 4 青共、全民青、民学同三者による組織合同のための大会で、全民青から参加、  
    文化部の責任者になり、合唱団に参加（逓信省労働者）
- 49. 8 定員法により逓信省を鹹首、復職運動を展開
- 51 谷の後を受け全建労東北総支部専従となる
- 52.12 「1952年日本のうたごえ」に参加
- 53. 1 責任者となって機関紙「うたごえ」を発行
- 54. 6 壇上の指導で東北音楽センター強化され代表
- 55. 2 その後組合活動に専念のため合唱団をやめる

## 2. 常任体制（専従）の確立とその崩壊

1953.10～1956.2 1～3期生

1953年に討議されて公表された綱領では、「うたごえ運動の東北の中心になって、誇らかに進んで行」くことが宣言され、そのために①新しい音楽うたごえの勉強②祖先の遺産民謡の勉強・堀おこし③うたごえを広めるための指導・公演・うたう会の開催④お互いの成長のための勉強・話し合い⑤平和的諸運動えのうたごえでの参加⑥其他

必要と認める諸活動、が明記されている。また、規約によると、団は「期生」「研究生」「常任」によって成り立つとされる。「期生」は原則として募集とされ1年間の教育期間を求められたが、2期生が募集された54年11月までに入団したものを便宜的に1期生と呼んでいる。1期生には、前述した以外に大泉とも子（房妹）、那須昶正、伊藤昭七、大橋力（いずれも54年4月に結成された東北大学翠生会メンバー、大橋は現「芸能山城組」代表）等のメンバーが確認されている。（いずれも入団時期不明）また、高平つぐゆき（電電公社）もこの時期に参加している。2期生(54.11より募集)には、志子田幹人（学校生協）、野田俊次（県職員）、萱場千枝、斎藤二郎（東北大、後「どんぐり」結成）、茨木ふみ（「どんぐり」）、田茂勝一（国鉄）らがいる。3期生(55.5より)には、佐川邦夫（「どんぐり」）らがいる。

「常任」とは期生を終えた後に選抜されるいわゆる専従のことであるが、「研究生」という性格が曖昧なものであったために、期生を終えても団に残り運動に専念する団員という性格が強い。谷と同時にレッドパーズ後壇上に誘われて合唱団の専従になった加藤駒幸（55年2月から書記長）が初代常任となり(54.6)、二女高を卒業した房と八巻喜代子（宮城学院短大学生）がこれに続く(55.4)。決して給料が支給された専従ではないが、合唱団の初期には4名の専従が存在していたのである。

県内の組織化では、第2回青年合唱祭を「宮城野のうたごえ」として成功させ、これが宮城のうたごえ祭典の発足となっていった。（実行委員会・仙台市教委が主催し、県労評、社青同、仙台芸友会後援による。6団体参加＝53.11）第1回日本のうたごえ祭典では、仙台合同合唱団として36名が参加し、谷指揮、佐々木伴奏によって「多賀城音頭」「仙台ゴムの歌」「はらからよ」「真実の勝利のために」を発表している。

この時期、全国合唱団会議常任委員会で中央合唱団1期生の地方派遣を決定し(54.3)、仙台では壇上さわえが中心になって総評と提携したオルグ活動を展開する。芸友会コーラス、コールブルネル、中江、西多賀、七郷などにうたう会が発足したほか、国鉄スワローコーラス、電通を始め各職場にコーラス続々生まれる（約20カ所）。仙台合唱団は国鉄を始め在仙の職場サークルだけではなく、中新田や古川のうたう会など20近くのサークル指導を行っている。また東北音楽センターも強化され斎藤が代表となる。その後、仙台合唱団が中心となって東北合唱団会議を組織(54.4)し、東北全体の運動へと展開していく。東北のうたごえ祭典をとの声もあったが、県労評が支援した「みちのくのうたごえ」(54.10)は県レベルのうたごえの組織化を重点としたため宮城の祭典となり、職場のうたごえが多数参加し40団体1000名の祭典となった。芥川也寸志や中央合唱団が特別出演したほか、青森、山形、岩手などのサークルも参加した。9月には弘前で東北農村青年男女の集いも開催されるなど東北のうたごえの組織化も始まった。（54年1月に福島合唱団の前身である福島どんぐり合唱団結成、7月には第1回五色の集いも開催されている。）54年日うた祭典は東北合同として参加し、「そうらん節」「どじょっこふなっこ」「真実の勝利のために」を歌ったほか、その後民族歌舞団ほうねん座（70.4結成）を主宰していった武藤桃州が率いる坂病院うたう会は、郷土舞踊「大漁うたい込み」で参加した。

恒常的全国組織としての日本のうたごえ実行委員会は55年2月に発足し、全国の運動を祭典だけではない日常の運動として組織していったが、仙台合唱団もその方針を受けて、みんな歌う会の運動（第1回は55.3）、合唱サークル協議会の組織化や労音問題（55.8仙台労音の結成）の取り組み等を展開していった。55年には平和と友情のうたごえ祭典（24団体参加）や第2回みちのくのうたごえ祭典（宮城県の部27団体、東北の部県別6団体、産業別10団体）を2000名規模で開催していった。

しかし、社会運動においては、共産党六全協(55.7)の議論がまきおこっていた時代であった。その中で、うたごえに対する反共攻撃（河北新報に「うたごえは日共の新戦術」という記事掲載。55.3）や読売新聞に載った芥川也寸志の5つの提言（「巾広論」という名で議論されたが、うたごえ運動の弱点として、①理論の欠如、②政治闘争との結びつきの非現実的側面、③無理矢理歌わせるやり方④音楽的な高さを追求する姿勢の弱さ、⑤専門家との協力の不十分性などが指摘された。）、雑誌「知性」のうたごえ特集(56.3)などをめぐって、文化運動の方針での論争が続けられていた。八巻は結婚準備で専従をやめ(55.7)ていたが、「巾広論」の立場に立ち、仙台労音結成に力を注いでいた谷も壇上と論争をくりひろげた結果、その後第一線からは退くこととなる。

また、好意で借りてきた白百合学園北門の朝鮮総連事務所は、事務所拡張に伴ってレッスン場としては使用不可能となり(55.7)、合唱団はレッスン場を失ってしまった。これに財政問題等もからんで、55年秋より音楽センターは崩壊状態となる。さらに、加藤駒幸が個人的問題で合唱団をやめたほか、房も就職準備のため常任をやめ、56年2月までに全ての常任がいなくなるという結果になってしまった。

#### 加藤 駒幸 1期生

- 54. 1 壇上に誘われ電報局を辞めて入団
- 54. 6 仙台合唱団常任になる
- 55. 2 書記長兼組織部長となる
- 55 個人的事情で合唱団をやめ、その後東北ラジオ商会勤務

#### 高平つぐゆき 1期生

- 54. 9 東北農村青年男女のつどい後入団（電電公社職員、夜間学生）
- 55. 2 技術部責任者となる（宣伝担当）
- 55. 6 入院
- 56 ピアノ購入のためトロイカでアコーディオン伴奏始める
- 57 作曲活動を開始
- 57.12 日うたで「よろこびの歌」発表
- 58. 3 再建時の新委員会で指揮者となる
- 59. 3 総会で常任委員となる（技術部）
- 59. 7 4期生終了とともに終了
- 60. 6 アコ教室を始める

安保闘争にはアコーディオン伴奏でうたごえ行動隊に参加  
電通コーラスで活躍

- 60. 7 仙台うたごえ協議会準備会に参加
- 60. 8 仙台うたごえ協議会に個人加盟
- 60. 10 宮うた祭典審査員
- 62. 4 アコ教室1期生募集 伴奏者として活躍
- 62. 6 仙台合唱団第1回演奏会実行委員 伴奏
- 63. 9 宮うた祭典審査委員
- 64. 5 電通のうたごえ仙台祭典企画部長・創作センターメンバー  
日音協から「君は胸を張って」のソノシート発行
- 65 清瀬保二から作曲法を学ぶ
- 66. 8 新専従となる高橋宏君を励ます会発起人
- 66. 8 仙台合唱団に復団 「人のいい恋人たち」等創作
- 66. 11 日うた祭典合唱発表会指揮
- 67. 8 臨時総会で委員となる
- 67. 9 オペラ沖縄制作委員会より推薦され派遣要請
- 68. 8 臨時総会で教育部長になる
- 68. 9 宮うた合唱創作発表会で「ベトナム参戦国の母や妻に」「春の使者」発表
- 68. 11 日うた祭典で「春の使者」激励賞
- 69. 1 自発的に演奏会実行委員会を作る
- 68. 2 第2回演奏会企画部長 以降演奏会で指揮
- 69. 7 総会で教育部長
- 70. 2 仙台労音合唱団（後の仙音アコール）常任指揮者となる
- 70. 12 日うた祭典で「私たちの青春」「チェロのための小品」創作70年賞
- 70. 12 総会で副委員長
- 71. 2 井上頼豊チェロの夕べで作品が演奏される
- 71. 5 東北創造活動者講習会参加
- 72. 5 総会で副委員長
- 72 民族歌舞団ほうねん座結成 作曲者として参加
- 73. 5 総会で委員長になる（教育、うた協も担当）
- 74. 3 総会で委員長
- 75. 1 総会で委員長
- 75. 11 高平つぐゆき作品集を発行
- 76. 1 高平リサイタル開催
- 76. 4 総会で委員長
- 76. 7 指揮者交流で京都ひまわり合唱団演奏会で指揮
- 76. 11 高平LP全国制作委員会発足
- 77. 1 福島市でレコーディング

- 77. 1 レコーディングで東北放送出演
- 77. 5 総会で委員長
- 78. 8 総会で団長
- 78. 9 宮うた祭典実行委員長
- 78. 9 臨時総会で三役から降りて創造委員長になる
- 78 利府のお母さんコーラス「コールマリード」指導
- 79. 5 新メーデー歌「国のすみずみから」2位入選
- 79. 5 東北教育者懇談会参加
- 79 壇上さわえリサイタルで作品発表
- 79. 7 総会で創造委員長、常任委員会には適時参加となる
- 79.11 日うた祭典で「自由なる朝へ」を全国合同で指揮
- 80. 2 日うた常任委員になる
- 80. 4 「金冠のイエス」公演協力
- 80. 8 第1回平和と文化の集い実行委員長
- 80. 8 第1回東北うたごえ教育者懇談会開催
- 80.10 電通祭典（仙台）企画責任者
- 80.11 宮うた祭典実行委員長
- 81. 2 教育部長代行となる
- 81. 4 第2回東北教育者懇談会参加
- 81. 8 第2回平和と文化の集い実行委員長
- 82. 3 一身上の都合で休団
- 83.10 復団
- 84. 1 第10回演奏会に音響、編曲で参加
- 84. 3 84連帯と交流の集いで地底のうた合唱団指揮
- 84. 4 団総会で委員（宮うた担当）となる
- 84. 7 コールマリード小さな音楽会指導
- 84. 9 星空コンサートIN長町で指揮
- 84.10 星空コンサートIN泉で指揮
  - ・医療のうたごえ「セデス」指導
- 85. 2 電通長岡事件裁判「対談と合唱の集い」で組曲「母さんの樹」指揮
- 85. 4 団総会で委員（副指揮者）となる
- 85. 7 なくせNUKESコンサートで「原爆の日より」発表
- 86. 6 一身上の都合で休団
- 86 組曲「ビキニの海は忘れない」浜松センター合唱団により初演
- 86.10 童謡集「子どもの四季」作曲 そのうち「風」が第2回三木露風賞受賞
- 87 横浜・鳩の森愛の詩保育園「卒園する子どもたちへ送るうた」作曲に参加
- 87 全国電通労働者合唱団「ザ・ナッツ」結成 常任指揮者となる
- 88 組歌曲「胸の深くに波よせて」初演

- 88. 10 電通のうたごえ仙台祭典音楽責任者
- 89 福田由美子氏による高平作品リサイタル開催
- 90 合唱組曲「告発」東京南部合唱団により初演
- 90. 3 「鳩の森を巣立つ子どもたちへ」発刊
- 90. 5 「ザ・ナッツはじめてのコンサート」指揮
- 91. 5 合唱団美樹により合唱組曲「この星はぼくらの星だ」初演
- 91. 8 「高平つぐゆき作品集」発刊
- 91. 8 作曲活動30周年を祝う「鳩の森愛の詩コンサート」

#### 八巻喜代子→佐藤 2期生

- 54. 11 2期生として入団（宮城学院短大学生）
- 55. 2 宣伝部長となる
- 55. 4 合唱団常任となる
- 55. 7 結婚準備で常任をやめる
- 58. 3 再建時の新委員会で機関紙部を担当
- 58. 6 合唱サークル協議会結成大会参加
- 59. 3 総会で委員に再選

### 3. 宮城県合唱サークル協議会の結成と合唱団の再建

1956.3～1958.6

4期生前半

常任体制が崩壊したとはいえ、残った団員によって職場オルグ活動などは続けられていた。戦後間もなくから活動していた県庁や農林統計等職場の合唱団とともに、国鉄スワローコーラス(54. 3)や翠生会合唱団(54. 4)、坂病院が主体となった塩釜合唱団(55. 11)などが結成されていたが、仙台合唱団の停滞期には期生修了生も加わって伊勢堂コーラス（伊勢堂下青年会の手によって発足、その後合唱団「どんぐり」となる。＝56. 7）や、労音と協力して作られた合唱団「いずみ」(57. 9結成)などが地域の中で組織されていった。

「いずみ」に関しては労音と仙台合唱団の協力で結成されたと理解されているが、「宮城のうたごえ運動における動揺と混乱の時期の典型的な産物」という評価もあるように、うたごえ運動における中心合唱団の内容、役割に関する理論的弱さがあったことは事実であろう。その弱さが「巾広論」と結びついた時に、大衆化と運動化の接点をもとめ、中心合唱団型ではない新しいタイプの地域合唱団が目指されてきたということでもある。仙台合唱団では歌えないが地域では歌えるという青年層を作り出していることである。一時宮城のうたごえのサークルの中では、『いずみ』の様に美しく、仙台合唱団のように戦闘的に歌おう」というスローガンが語られたこともあった。しかしこの傾向は、70年代から80年代前半にわたる労音合唱団（後の仙音アコール）との



関係や、仙北、仙南の地域サークルと仙台合唱団の関係を巡って、その後も同じ様な位置を占めることになっていたことに注目したい。これらはうたごえ運動の大衆的な広がりであるのか、それとも中心合唱団の拡散なのであろうか。仙台合唱団は第1回目の停滞期を迎えたのである。

しかし56年11月には、以上のサークルとともに宮城県のうたごえを開催している。これはイベントにあわせてサークルを集めるという典型的なスタイルでもあった。日なた祭には、「どんぐり」の斎藤二郎（2期生）が、東北合同として「外山節」「夕焼けの歌」の指揮を行っている。同様に、57年にも日なたの取り組みの組織として「宮城のうたごえ協議会」を結成し、宮城県うたごえ集会を開催した(57.11)。日なた祭では創作音楽会に「どんぐりさん」（斎藤作曲）のほかに、高平の作曲による「よろこびの歌」を発表したが、全国合同「砂川」には参加できなかった。（高平は同年の日本のうたごえ記念創作「我等の願い」が後にプロの作曲家となったいずみたくと並んで優秀作で入選している。）

57年3月に県労評主催で中央合唱団公演「春の集い」がもたれ、関鑑子やわらび座も出演するイベントが催された。この取り組みの中で仙台合唱団の再建が課題となり、総会を開催し困難を打開するために4期生募集の計画がもたれた。4期生は40名の規模で集められ入団式を行ったが（乳銀杏保育園57.6）、この募集においても合唱団の内容がはっきりしておらず、「団員と期生との間の隔たりがあった」と総括されている。

しかし、一方では労評青婦協に支援された職場の合唱団が力を強め、また、「巾広論」の立場に立って活動を展開してきた地域サークルが前進してくると、県内サークルの協議会結成の気運が高まっていた。うたごえサークル協議会に対する議論は58年初頭から検討され、1月には合唱団白樺の指揮者北川剛を囲んでの懇談会がうたごえ喫茶トロイカでもたれ、「いずみ」、労音、翠生会、グリーンウッドなど多数のサークルが集まった。中心になったのは2期生の志子田である。志子田は57年11月に団機関紙「うたごえ」を復刊させ責任者になっており、第1回日なた総会（57.12）に参加するなど、実質的に谷と交代して委員会崩壊期の仙台合唱団の代表となっていた。まず58年3月に仙台合唱団、「いずみ」、「どんぐり」、翠生会、農林統計うたう会、長町コーラスなどが加盟し「うたごえ春の集い」を開催し、その後討議を重ねた結果、「うたごえサークル協議会」ではなく、当面は交流・援助のための連帯組織である「宮城県合唱サークル協議会」が結成される(58.6)。後に41団体1020名が加盟することになるが、発起人の中から志子田が初代会長となり、副会長は「いずみ」の手塚昂吉であった。

これらの動きの中で、仙台合唱団の役割も再検討されざるを得ず、3月の総会でアンケートを実施したうえでの規約・綱領の検討を開始し、4月の総会では、以前からの団員5名を別にし残りを全員（4期生を含む）から選挙するという方法で新委員を選び、5月の新委員会第1回会合で2代目委員長に野田、指揮者に高平、組織部長には志子田を選出し、新しい体制が確定されることになる。新たに選ばれた役員には、中元良子、相沢輝明（技術部、いずれも4期生）、大槻宇多子（組織部・4期生、その後中央合唱団常任になる）、佐々木春子（組織部・3期生）、佐藤（八巻）喜代子、佐川（機関紙部）、

早坂玲子（財政部、4期生）などがいる。房は、技術部と財政部をかねる。4期生入団以降1年を経過したが、残ったのは14名でしかなかったため、新たに4期生を追加募集し期成としての教育をもう1年続けることとした。レッスン場は花京院の朝鮮総連事務所を借りることとなる。

以上のように、仙台合唱団の停滞期においても宮城のうたごえは活動していた。この間社会党県連の統一大会（56.1）以降急速に県労評の組織が拡大し、労評青婦協（56.3）や仙台地区労（57.7）が結成され、宮教組、県職組、全遼など多数の組合員を要する労働組合が加盟することにより、労働運動は大きく伸びようとしていた。労評の推薦によって大沼県知事や島野仙台市長が当選していった。また、宮城県原水爆禁止協議会（57.7）や宮城県松川事件対策協議会（58.7）の結成を始め、勤評反対闘争や警職法反対闘争など、地域と結びついた運動も展開されていった。その流れは59年4月の日米安保条約廃棄・改定阻止宮城県民会議の結成に結びつき、60年には「このころ、官・民労組の春闘最高のもり上がり」（『宮城県労働運動史』より）という情勢を作り出していた。60年安保闘争前夜という社会状況の中で、多くの青年の革新的エネルギーが満ちあふれていた時代であったとはいえるが、後の宮城のうたごえ協議会組織の端緒となった合唱サークル協議会結成の運動の中で、仙台合唱団も再建されていったのである。（58年7月には古川、涌谷、岩出山、小牛田、南郷、中新田の各地域のサークルが結集して大崎地方合唱サークル協議会も結成されている。）

斎藤二郎→川田            2期生

54. 4 東北大翠生会合唱団創設に参加（東北大農学部学生）

54. 11 2期生として入団

56. 7 伊勢堂コーラス結成→合唱団「どんぐり」となる

56. 12 日うた祭に参加「夕焼けのうた」指揮（農学部研究生）

57. 12 日うた創作発表会で創作曲「どんぐりさん」発表

58. 1 オリエンタル酵母工業株式会社に就職、東京へ転出

野田 俊次 2期生

- 54.12 2期生として入団（県庁職員）  
県庁合唱団、「いずみ」などにも参加
- 58. 3 再建のための総会で新委員長に選出される
- 58. 5 合唱サークル協議会準備会に参加
- 58. 9 宮うた祭典財政部長
- 59. 2 東北合唱団会議参加
- 59. 3 合唱サークル協議会事務局長になる（仙台合唱団代表を志子田と交代）
- 59. 9 宮うた祭典財政部
- 60. 3 古川に転勤のため団委員長を藤村と交代→古川合唱団へ
- 60. 4 宮うた実行委員会に参加
- 61. 6 宮うた祭典で大崎のうたごえ指揮
- 62. 6 第1回演奏会に参加

志子田幹人 2期生

- 54.11 2期生として入団（学校生協）  
茨木ふみ（2期生）らとともに民青团役員として活動  
委員会崩壊期に仙台合唱団を代表
- 57.11 機関誌「うたごえ」を復刊させ責任者
- 57.12 第1回日うた総会に出席、実質的に谷と役割交代となる
- 58. 2 日うた実行委員会に参加
- 58. 2 宮うたサークル協議会発起人会に出席
- 58. 3 再建総会を高平、野田とともにリード
- 58. 5 再建委員会で組織部長となる
- 58. 5 宮城県合唱サークル協議会準備会世話人
- 58. 6 全国合唱団会議に参加
- 58. 6 宮城県合唱サークル協議会を結成し会長となる
- 58.12 須藤五郎後援会世話人
- 59. 1 全国合唱団会議に参加
- 59. 3 合唱サークル協議会総会で会長を交代
- 59. 9 宮うた祭典組織部
- 59.11 日うた祭典運営本部
- 60. 4 宮うた実行委員会事務局
- 60.10 宮うた祭典事務局長代理
- 60.11 日うた祭典実行委員

茨木 ふみ 2期生

- 54.11 2期生として入団（東北大）

志子田とともに民青团役員として活動

56. 7 伊勢堂コーラス結成、その後合唱団「どんぐり」に移行し会員になる

58 民青合唱団代表になる

59. 4 総会で委員に選出（情宣部）

59. 6 うたごえニュース発刊

同時に合唱サークル協議会機関紙「コーラス宮城」担当

・ 宮うた祭典実行委員（総務部）

その後仙台から転出

#### 4. 綱領・規約の確定まで

1958.6～1961.3

4期生後半～7期生

うたごえ運動における中心合唱団の役割は、「うたごえは平和の力」をスローガンにして全国的統一をめざした第1回日本のうたごえ実行委員会総会(58. 12)において確立されたといえるが、各地で実践されるためには、具体的な方針として提示される必要があった。大衆路線は「巾広論」を含む必要があったとしても、その中では、運動の組織者としての基本的役割を、団員一人一人に自覚させることが求められた。すなわち、職場合唱団や労音、「いずみ」などの地域合唱団との違いをどうとらえるかである。一方では運動に対する反共攻撃が強まる中で、新しい綱領や規約を自らが作り出すこと、そのためには団員一人一人のうたごえ運動に対する意見を集約することが必要であり、以上の点に関わる全団討議が機関紙上でも展開され、活動の方向が模索されていた。

日うた実行委員会にとっても、仙台合唱団の再建は重要課題であった。58年7月に東北地区うたごえ活動者会議が宮城、山形、福島、青森から30名ほど集まって仙台で開催されたが、仙台合唱団は東北地区の連絡のセンターになることを求められていた。（この時には井上頼豊が来仙し合唱講座を開いている。）さらに、第6回国鉄のうたごえ祭典の仙台開催を決定し、中央合唱団の中尾富子がオルグとして8カ月わたって滞在し、仙台合唱団はレッスンも含めた専門家による定期的な指導を初めて受けることとなる。（59. 3～11）

59年定期総会は、中心合唱団へと発展するための意思統一が課題となり、常任委員会体制を確立する。（59. 4）野田委員長のもとに、常任委員には高平（技術部）、房（財政部）、佐々木（情宣部）に加えて、山形でうたごえ運動の経験があり58年4月から東北大の大学院に研究生として進学し4期生となった藤村三郎が、志子田と交代の形となって組織部を担当することになった。委員には、佐藤喜代子の他に、針生喜太郎（4期）、茨木、をはじめ、4期の後半から入団した佐久間和男や高橋勤らが入った。また、レッスン場は電通会館（五ツ橋）となり、乳銀杏保育園、花京院朝鮮総連事務所と移動していた状態を解消した。（59. 2）合唱団事務所も、国鉄祭典の取り組みのいきさつか

ら、宮うた実行委員会と一緒に国労仙台支部内に一時移している。

県内では初めての全国祭典である国鉄のうたごえ祭典は、合唱サークル協議会の組織を挙げて取り組み、59年7月に2300名集めて成功させた。その後仙台合唱団では、4期生の修了演奏会(59. 7)と5期生の募集が行われた。この演奏会は、実質的には1期から4期までの修了演奏会という性格を持ったものであった。直後の団総会(59. 8)では、「旧団員(4期生以前)と新団員(4期生のこと)の無原則な混在から来る立場の不統一を基本的に一掃」としたと総括されている。5期生の募集からは、「修了後入団試験が受けられる」という内容が定められた。これによって、研究生としての期生の性格が確立され、団員としての資格は研究生での教育期間を経た後に認められるというものとなったのである。4期生の修了によって団在籍者は62名と大幅に増加したが、4期生の後半は24名入団したものの、4期生の修了までに高平など旧団員も含み28名が退団している。レッスン出席は30から40名であった。

59年10月の臨時総会で綱領・規約原案が提示されたが、決定は引き延ばされ検討作業は継続された。総会議案では「仙台のうたごえの中心となろう、いずみとともにその体制を整えよう」ということが確認された。また、5期生の募集においての呼びかけ文では、「仙台合唱団は『うたごえは平和の力』のスローガンの下に、うたごえ運動を広め、演奏、組織活動を積極的に進める中心合唱団です」という紹介を行っている。60年3月総会で確定にはいたらなかったが、運動の指導的役割、典型的な演奏と教育活動、活動家集団の形成、70名の団の実現、宮うた事務局の強化など、中心合唱団の内容に迫る方針が決定された。古川に転勤となった野田の後を受け、藤村が3代目の委員長となる。

60年安保が地域、職場で闘われた時期には、日うたから壇上がオルグに入り、仙台合唱団を中核とするうたごえ行動隊が職場集会や街頭宣伝に入り込んで大活躍をした。この激烈な闘いの中で、仙台合唱団では団内と団外にわたっての組織化が展開された。団内では、中央講師(中尾、井上)も含め教育資料に基づいた団員教育や5期生以降のいわば合唱団研究生の教育と、財政白書づくり(59. 8)に見られる中心合唱団としての団運営に対する方針の作成である。まさに文工隊型から合唱団へと形を整えていく中心合唱団としての課題でもあった。この時期、結婚を機に房が再び常任活動家となる。(60. 4)

団外では、合唱サークル協議会を発展的に解消して、仙台のうたごえ協議会結成の取り組みを行った。これは地域ごとにうたごえを組織化していこうという方針=仙台の中心合唱団としてはまず仙台の運動を組織化し、その指導的役割を果たすという方針に基づいたものでもあった。合唱団・サークルの連帯・協力の組織ということから一歩踏み込んで、軍備全廃等のスローガンは当面押しつけないが、「平和で健康的なうたごえを歌い広める」という段階での仙台のうたごえの統一を求めていった。そこでは仙台合唱団を中心にうたごえ運動を統一していくという組織化の方向が論議されていた。安保闘争と平行して7回にも及ぶ準備会と討論集会を経て結成総会が60年8月に行われ、会長には合唱サークル協議会会長で東北合唱団会議代表にもなっ

ていた「いずみ」の菊地毅が就任し、仙台合唱団では神戸和雄（5期生・東北大職員）が事務局長となる。加盟は「いずみ」、仙台合唱団、専売、翠生会、一般合同労組あすなろ、東北ゴム、電通、「どんぐり」、国鉄スワロー、日通、農林の11団体で、その他に個人加盟として谷やアコ教室を主催し講師となっていた高平など7名が参加した。日  
うた祭典の取り組みに際しては、実行委員は志子田、東北担当の責任者を藤村や神戸  
が担当し、宮城のうたごえ代表は杉本勇（4期生）になり、60年祭典には宮城から260  
名が参加している。

以上の、内外に対する活動をもとに、61年3月総会で、2年以上にわたる討議をまと  
め、綱領・規約を確定する。綱領には「仙台合唱団は労働者階級の立場に立って、民  
族の歌をつくり、建設的な日本のうたごえと、諸民族の平和な美しい歌を生き生きと  
歌い広め、東北地方にうたごえ運動をすすめます。仙台合唱団はこれをはばむ日米反  
動勢力の政策と植民地文化に反対し、全国の中心合唱団と団結しすべての平和と独立  
をめざす民主勢力と手を結び闘います。」と述べられ、70年代後半に改訂作業が行われ  
るまで、団活動の指針となったものであった。

#### 佐々木春子 3期生

56.12 3期生として入団（国鉄）

この間病気で1年休団

58. 2 再建総会で委員（組織部）に選出

58. 6 合唱サークル協議会結成大会に参加

59. 4 総会で常任委員に選出（情宣部）

59. 6 うたごえニュース発刊（週間）、後の団週報へ

同時に合唱サークル協議会機関紙「コーラス宮城」担当

60.10 宮うた祭典で司会

#### 中元良子→高橋 4期生

55. 4 東北大工学部職場うたう会に参加

57. 6 4期生として入団

58. 3 うたごえ春の集い司会者

58. 5 再建委員会で委員（技術部）に選出 レッスン指導、歌唱指導で活躍

60. 6 安保闘争にうたごえ行動隊で活躍

60.10 宮うた祭典仙台合唱団発表曲指揮

61. 5 8期生教育担当

61.12 総会で芸術局員になる

62. 2 総会で芸術局員と情宣部員をかねることになる

62. 4 4組合同結婚式で高橋勤と結婚

62. 6 第1回演奏会事務局長

藤村 三郎 4期生

- 54. 4 山形大学に入学し山形やまびこ合唱団に加入、指揮者など歴任
- 58. 4 東北大学大学院経済学研究科研究生になり来仙  
4期生として仙台合唱団に入団
- 58. 9 全国合唱団会議に参加
- 59. 2 国鉄祭典成功のための東北合唱団会議参加
- 59. 4 大学院入学 総会で常任委員（組織部）になる
- 59. 7 国鉄祭典地元合同責任者
- 59. 7 中尾さんを送る夕べ発起人
- 59. 9 宮うた祭典企画部
- 59.11 日うた実行委員会で全東北行動責任者
- 60. 3 総会で野田のあとを継ぎ委員長になる
- 60. 6 安保闘争うたごえ行動隊キャップ
- 60. 6 仙台のうたごえ協議会準備会参加
- 60. 6 仙台合唱団活動家会議参加
- 60.10 宮うた祭典仙台合唱団発表指揮
- 61. 3 大学院修士課程修了 博士課程進学
- 61.12 総会で委員長 大学院中退し専従になる
- 62. 2 総会で委員長
- 62.12 日うた祭の後全国合唱団会議事務局長として東京に1年滞在
- 64. 1 仙台に戻り総会で委員長
- 64. 5 全国合唱団会議参加
- 64. 8 原水禁大会うたごえ代表団として参加
- 64. 8 病気で入院
- 64. 9 東北のうたごえ祭典（山形）事務局次長
- 64.12 個人名で「組織および体制について」「技術、教育白書」「団建設をおしすすめ成功を重ねていこう」発表
- 65. 1 東北のうたごえ活動者会議参加
- 65. 3 宮うた実行委員会事務局長
- 65. 6 東北のうたごえ事業部会議参加
- 65. 7 総会で委員長
- 65.10 東北のうたごえ祭典（岩手）副委員長
- 65.12 宮うた祭典実行委員会副委員長
- 66. 2 東北合唱団会議参加
- 66. 2 総会で委員長をやめ委員に
- 66. 5 東北のうたごえ協議会結成し事務局長
- 66.10 東北のうたごえ祭典（福島）事務局長
- 66.12 総会で役員から降りる 全国中心合唱団常任委員も宏と交代

- 67. 2 宮うた協総会で常任委員（総務）
- 67. 4 宮うた祭典事務局長
- 67. 8 団臨時総会で委員長に復帰
- 67. 10 東北のうたごえ祭典（青森）合唱発表会審査委員
- 67. 12 東北のうた協代表者会議参加
- 68. 1 2月いっぱい病欠
- 68. 8 東北のうたごえ祭典事務局長
- 68. 9 日うた教育活動者会議参加
- 69. 1 日うた実行委員会参加
- 69. 2 第2回演奏会実行委員会委員長となる
- 69. 4 宮うた祭典実行委員会組織部長
- 69. 7 団総会で正式に退団

神戸和雄      5 期生

- 55. 4 東北大教育学部入学で来仙
- 59. 6 中退し、東北大学事務局人事課に就職
- 59. 7 5期生として入団（東北大学職員）
- 60. 3 総会で副委員長
- 60. 4 宮うた実行委員会事務局  
    安保闘争うたごえ行動隊副キャップ
- 60. 6 仙台のうたごえ協議会準備会参加
- 60. 8 仙台のうたごえ協議会事務局長
- 61. 12 日うた実行委員
- 61. 12 総会で副委員長
- 62. 2 文団連結成準備会参加
- 62. 4 4組合同結婚式で大場幸子と結婚
- 62. 6 第1回演奏会実行委員
- 63. 2 中央専従として東京へ行った藤村の後を受け団総会で委員長になる
- 63. 7 宮うた実行委員会事務局
- 64. 1 藤村が戻り、団総会で書記長になる
- 64. 5 東京へ転勤



## 第2節 専従の時代

### 1. 東北の中心合唱団へ

1961.3～1963.3      8期生～11期生

新綱領に基づく団活動の基本方向は、「うたごえは平和の力」「いのち新たなうたごえで闘いの世紀を開こう」というスローガンのもとに、「うたは闘いと共に」を実践することであった。そのために合唱団は県と東北の先頭に立つことがめざされ、具体的方針として、①指導部の強化、②典型的演奏、③団員の倍加、④団員の結集、の課題を打ち出した。特に演奏（週2回レッスンなど）と教育（教育資料の発行など）を重視する取り組みがなされた。演奏においては、60年から全国の方針で、宮城のうたごえ祭典の中にコンクール形式による合唱発表会がもたらされた。日本のうたごえ祭典（後には東北のうたごえ祭典）の県予選を兼ねた位置づけで、参加合唱団の順位がつくことになったのである。第1回目の60年祭典では、中元の指揮により「子どもを守るうた」を発表し第1位となっているが、61年の「輝く道」（中元指揮）は「いずみ」に次いで2位であり、必ずしも宮城のうたごえの中でずば抜けた合唱力量を持っているとはいえないものであった。この時期の集団創作としては、松川無罪判決をめざす大行進で歌われた「迎えよう二十人」（61.7）がある。8期生募集は55名となり団員50名に加えて初めて100名を越え、倍加が達成された。8期生は初めて期生委員会（自治会）を作り、独自に機関紙「ねっこ」を発行した。

61年12月臨時総会で藤村を専従とすることが決定され、「専従の時代」が始まった。藤村は東北大学大学院経済学研究科博士課程に進学していたが、それを中退してこの任務に就いたのである。新たに確立された体制では、技術部、教宣部は芸術局となり、福井とも子（5期）を中心として、房、中元、佐藤勝男（6期）らが期生の教育と団レッスンを担当した。団歌集を発行し1700部普及した。団内組織は佐藤千枝（6期）、情宣は半沢紀男（7期）が中心となり、団週報が62年1月より常任委員の持ち回り担当で定期的に発行されるようになった。出産のため休団した房に変わって書記長は柳川定夫（6期・国鉄）になる。

62年2月総会では、「停滞から前進への1年」と総括され、200名の団、5人の専従を目標とする総合2カ年計画のもと、団の第1回演奏会や5000名規模での東北のうたごえ祭典の計画、主要な産業経営に合唱団を作りそれぞれを東北のセンターにすることなど、東北の中心合唱団へと発展していくための方針が決定された。対外的には県内ばかりでなく、一関、青森、東根、山形など東北全体に対する組織活動や援助も位置づけられていった。日うたの東北オルグ（山形、秋田、青森、盛岡）には藤村も同行し、山形センター合唱団（62.3）、福島磐城地区うたごえ協議会（62.7）、秋田県うたごえ協議会（63.2）などが結成されていった。東北合唱団会議は東北のうたごえ祭典の計画を実行に移したが、基地撤去のスローガンに社青同をはじめ組合として取り組まない単産もかなり存在していた。第1回祭典は仙台市レジャーセンターで開催され

たが（実行委員長は県庁合唱団の斉藤義、62. 10）、目標の半分の34団体1500名の参加で宮城、山形、福島が中心であった。

県内では、仙台市長選に関連して文化関係団体を組織し、合唱団サークル以外に労演、映協、職場演劇サークル協や在仙劇団など23団体を集め「文化団体連絡協議会」を結成(62. 3)した。社共統一の島野市長候補に対して①音楽・演劇団体などが自由に使える練習会場の保障②芝居、オペラ、バレエなどの上演に適した近代的大劇場の新設③文化センターの建設④文化団体への具体的援助協力ー公会堂使用料の軽減、「市政だより」などの文化面の充実・編集参加⑤恒常的な文化団体と市政との交流の場をつくること、を申し入れるなど、様々な分野の協力関係を打ち立てていった。市長選の取り組みでは初めて社青同主催の集会で歌唱指導するなど、島野当選に際しては「統一戦線思想と実践の勝利」と評価した。また県民会館建設に当たっても、使用料、収容力、舞台設計などそれぞれの要求をとりまとめ知事に申し入れを行っている。

62年6月には、創立10年にして初めての第1回演奏会（宮城学院大講堂、545名）を開催した。実行委員長藤村、事務局長高橋良子であったが、実行委員には谷、佐々木、斉藤をはじめ、神谷（企画委員）や高平（伴奏も）など期生を修了した旧団員も参加した。歌い手は90名（団員49、10期生41＝10期生から団員は1班、研究生は2班と呼ばれた。）出演し、1部一心はいつも夜明けだ（世界のうたを中心）、2部一うたは闘いとともに（日本民謡、「燃やせ闘魂」「アジア平和行進曲」など闘いのうた）、3部一組曲日本の夜明け、の企画で、D51合唱団、合唱団いずみ、武藤桃州が賛助出演した。

62年の日うた祭典の翌日開かれた日うた総会で、仙台合唱団は盛岡合唱団の沢恩と並んで10周年記念表彰を受けたが、藤村は全国合唱団会議事務局長となり東京に常駐することになった。翌年2月の団総会で神戸が委員長、千枝が書記長となる。日うたからは変わって星野定雄が派遣され専従になる。同時に、国労仙台支部においてあった団事務所は、支部移転に伴い一時自動車会館にある民青県委員会内に移っていたが、事業基金とカンパにより一番丁利休ビル4階に自前の事務所を借りることとなった。(63. 3)レッスン場は全電通労働会館であったが（後には事務所を拡張してレッスンも行えるようになる）、この場所に東北音楽センターを開設したことにより、以降87年3月まで長きに渡って東北のうたごえ運動の中心センターとなる。

#### 福井とも子      5期生

59. 7 中元に誘われ5期生として入団（東北大電気通信研究所職員）

60. 3 6期生教育担当

60. 10 7期生教育担当

61. 5 8期生教育担当

61. 11 9期生教育担当

61. 12 総会で芸術局長に選出

62. 2 総会で常任委員

- 62. 4 第1回全国創作活動者会議参加
- 62. 5 10期生教育担当
- 62. 6 第1回演奏会実行委員（企画担当）
- 62. 9 東北大学工学部青年婦人部「麦笛コーラス」指揮者
- 62.11 11期生教育担当
- 65. 7 総会で常任委員（企画担当）
- 65.12 学習会を自宅で開催  
その後育児、家事のため退団
- 76.7 第7回演奏会にソリストとして参加

#### 佐藤千枝→藤村 6期生

- 60. 2 6期生として入団（専売公社仙台工場）
- 61.12 総会で常任委員（組織担当）
- 62. 2 総会で常任委員
- 62. 6 第1回演奏会企画委員
- 63. 2 総会で書記長
- 63. 6 中央合唱団仙台公演事務局長
- 63. 7 宮うた実行委員会事務局
- 64. 1 総会で委員
- 65. 1 東北のうたごえ活動者会議参加

#### 柳川定夫 6期生

- 60. 2 6期生として入団（国鉄長町機関区）
- 60. 9 動力車枕木コーラス結成（後のD51合唱団）指揮、代表
- 61.12 総会で書記長となる
- 62. 2 総会で委員（書記局員）
- 62. 6 第1回演奏会事務局員  
その後D51で活躍
- 65.12 宮うた祭典副実行委員長 合唱発表会審査委員

## 2. 民主運動の分裂に抗して

1963.4～1966.5 12期生～16期生

星野を専従とした時期は約1年であったが、神戸幸子（5期）、若生勝代（4期）、菊地幸市（8期）、菅原宏子（7期）などが新しい常任委員になりそれぞれの役割を分担していった。井上捷夫が団の正式なアコーディオン伴奏者となったこともあって、市内を4地区に分けて担当した1000万人うたう会運動が前進した。従来のホールでのうたう会以外に昼休みの県庁広場や西公園などでも開催され、100名の団をめざす運動が地

域に向かって積極的に取り組まれた。中央合唱団仙台公演(63. 7)やサークル指導、うたう会の組織により、63年度は事業の年間収入平均額を半年で達成するなど大きな成果を上げた。10周年記念となった宮うた祭典(63. 9)では、仙南、栗原なども前進し、県内初の地域祭典登米のうたごえ祭典も開かれた。(63. 11)第2回東北のうたごえ祭典は秋田で開催され、42 団体 3000 名が集まった。(63. 11)

ところが、団建設の課題は順調には進まず、全体の運動の中ではかなり立ち後れていた。11 期生は9名修了5名入団、12 期生は7名修了2名入団と一桁の状態が続き、64 年1月の団総会では団員26名、13 期研究生13 名にまで落ち込んでいた。研究生が少ないため受講料も減少し、事務所の家賃を含み財政赤字が12万円を超し、120部まであったうたごえ新聞もストップ(63. 9から64. 6まで)され、専従には人件費が払えない状態が続いた。藤村が戻り再び委員長となった64年、5月に神戸夫妻が急に東京に転勤という事態が起き、書記長、技術部長、財政部長の後任が決まらないという中で団体制も一時混乱した。書記長は勝代が代行することになって団運営を続けたが、発足1年で早くも音楽センター維持が困難になっていた。七十七従組の移転に伴い収入がなくなったことや家賃値上げなどのこともあるが、予定される家賃、雑費の支出15000 円に対してレッスン使用料の収入は9000円しかなく、計画性の欠如が指摘された。11 月に出された財政白書では、センター設立資金借入れ、アコーディオン代支払い、印刷費、中央合唱団公演赤字、レッスン会場費などの借金返済のためにセンター費用が月8000円ほどまかなえないことがはじき出された。専従人件費は専従個人の他サークルの指導料でまかなうとしても、その分団運営には支障をきたすことになっていた。結局は責任の所在が明らかでないという団内問題であったのである。赤字分は宮うた後援会の会費募集、年末カンパで補っていったが、団内に知らず知らずのうちに根付いていた専従や中央合唱団依存・請負の体質が問題にされた。その後藤村は個人名で「組織及び体制について」「技術、教育白書」「団建設をおしすすめ成功を重ねていこう」等の訴えを団員に出し、年末に臨時総会を開き団の活動の改善と団建設の必要性を討議した。

一方、60 年安保以降の情勢として顕著に現れてきたものとしては、県内においても63 年9月の宮城同盟の結成をはじめとする労働戦線の分裂や右傾化策動が強まってきたことである。第1回QCサークル大会が仙台で開かれたこともあり(63. 5)、職場の中での「日本的労働組合主義」や「構造改革路線」の主張など「分裂の季節」を迎えていた。また第9回原水禁世界大会(63. 8)での社会党・総評の不参加や10回大会での総評系の脱退は、県内では原水爆禁止宮城県民会議の結成(65. 7)につながるなど、原水禁運動の分裂は地域での革新運動の分裂をも引き起こしていった。うたごえ運動に対しても、特に労働組合組織の中からの攻撃という、これまでにない新たな事態が展開されはじめた。4.17スト(64. 4)をめぐる対応はこれを決定づけていった。(仙台合唱団の公式文書の中にも「4.17を中心とする謀略的な挑発ストのたくらみを未然に防いだ」という記述がある。)その直後に仙台で開かれた第9回電通のうたごえ祭典(64. 5)は、全電通労働組合中央本部から4.17の処分者をめぐっての祭典中止通告という干

渉がある中で行われた。電通祭典実行委員会が全電通中央本部の申し入れ＝①4.17スト処分者は祭典参加を控えること②組織決定外の政治論議をうたごえの中でやらないこと、を強行採決するという中で、開催をめぐる闘いが繰り広げられたのである。宮城のうたごえ実行委員会は常任委員会名で不当な干渉に対する撤回声明を出し、予定通り合唱創作発表会が三島学園講堂で1000名で開催され、祭典は公会堂に妨害をはねのけ39団体1000名が集まって成功させた。これ以降、うたごえ運動の中でもいくつかの労働組合が運動に干渉や敵対したり、労働組合とうたごえの関係が離れていく傾向を示すようになっていった。65年11月には日本音楽協議会（日音協）がうたごえ運動に対抗して結成され（委員長芥川也寸志、事務局長全通教宣部長）、運動の分裂は決定的になった。東北では「仙台文化人会議」や「みちのくのうたごえ」などの動きもあらわれた。

これらの困難を乗り越えるために、仙台合唱団および宮城のうたごえは外への普及活動を強めた。春闘・メーデー以外にも、県青年学生集会(64.5)、原水禁運動、スポーツ祭典(64.10)、東北大学市民と学生の音楽祭(64.11)などが取り組まれた。65年1月の団総会では「停滞から前進が始まった」と総括され、事業費は前年の1.6倍に増えた。66年2月の総会では勝代が委員長になり、全体としては上り坂にきているという認識の下、運動に対する請負と受け身をなくすために「一人が一サークル、一職場を持とう」という方針が提案されていった。

また、宮うた祭典や東北のうたごえ祭典も着実に前進していった。65年の宮うた祭典は27団体が結集し昨年を倍加した。（社会党、共産党、県労評、平和委員会が連帯の挨拶を行っている。）祭典終了後開催された宮うた実行委員会総会では、実行委員会から協議会へ移行する提案がなされた。仙台のうたごえ協議会が崩壊状態であったこともあって、この提案は積極的に受け止められ、66年1月から宮城のうたごえ協議会と名称を変更して新発足することになった。議長には県庁合唱団木曜会の斎藤義がなり、事務局長には金融イスクラ（62.8結成）の井上晶夫が就任した。66年5月には青森にうたごえ協議会ができ東北6県全てにうたごえ協議会が成立した。これをうけて、東北合唱団会議では日音協に対抗するためにも、東北のうたごえ協議会を結成した。（66.5）議長は斎藤義で、副会長は嘉藤都美子（福島）、芳賀晴雄（山形）、藤村は事務局長、勝代が副事務局長に就任する。

この一連の時期は、100名の団が半数以下に激減し、しかも財政的にも大赤字で、対外的にも分裂が始まったという大きな困難を抱えた時期であったはずであるが、団員が団活動において「停滞」といった認識は持っていなかったように思える。64年の日うた祭典合唱発表会での井上頼豊の評価にあるように、あくまで「消極性が克服できない」状態が問題であったのである。以前にもまして外には打って出ていたし、65年には団員を世界平友祭アルジェ祭典に派遣したりしている。むしろ、宮城のうたごえ運動や東北の運動は、仙台合唱団が少数であっても着実に前進していたのである。（専従の存在とともに国鉄や金融など職場うたごえサークルの力が大きい。）少数であるためにできなかったことは団の演奏会であるが、団活動の方針において演奏会の位置づ

けが小さい場合は、「停滞」という認識を持つには至らないという結果を示している。

若生勝代→井上 4期生

- 58. 7 4期生（後期）として入団
- 62. 11 臨時総会で委員（うたごえ新聞担当）になる
- 62. 12 第1回うたごえ幹部学校参加
- 63. 2 総会で常任委員となる
- 63. 6 三沢大集会派遣
- 63. 6 中央合唱団公演実行委員
- 63. 7 宮うた実行委員会事務局長
- 64. 1 総会で委員
- 64. 4 メーデーうたごえ行動隊で上京
- 64. 5 神戸転勤後書記長代理
- 64. 8 原水禁大会に派遣
- 64. 10 日うた沖縄公演に派遣
- 65. 1 東北のうたごえ活動者会議（わらび座）参加
- 65. 1 団総会で書記長
- 65. 7 団総会で書記長（財政担当）
- 65. 10 中央合唱団東北オルグ担当
- 66. 2 団総会で委員長になる
- 66. 3 井上晶夫と結婚
- 66. 5 東北のうたごえ協議会結成し副事務局長
- 67. 8 団臨時総会で財政部長 以降財政を担当
- 69. 7 団総会でうた協担当 以降うた協担当
- 73. 5 日うた常任委員になる
- 76. 4 団総会で書記長になる
- 77. 5 団総会で書記長
- 77. 7 郵便祭典現地実行委員長
- 78. 9 団臨時総会で副委員長
- 79. 7 団総会で常任委員
- 80. 6 総会で委員（日うた担当）
- 81. 4 総会で副委員長
- 81. 9 保母うた祭典（仙台）財政担当
- 82. 4 総会で副委員長
- 82. 10 国鉄祭典（仙台）組織担当
- 83. 5 総会で常任委員
- 84. 4 総会で常任委員

- 84. 9 日うた東北合同呼びかけ
- 84. 9 うたごえ40周年に向けての全国合唱団連絡会議運営委員会参加
- 85. 4 総会で副委員長 宮うた委員になる
- 85. 9 宮うたバリバリコンサート講評委員
- 86. 1 東北のうたごえ代表者会議参加
- 86. 6 総会で副委員長 宮うた委員
- 87. 3 総会で副委員長
- 87. 7 団友会結成呼びかけ
- 88. 3 総会でうた協担当になる
- 88. 5 うたとアコーディオンの夕べ呼びかけ人、実行委員会事務局長
- 89. 3 東北教育者懇談会参加
- 89. 3 総会で副委員長
- 89. 9 日うた誘致懇談会開催
- 90. 7 東北うたごえ代表者会議開催
- 90. 8 総会で副委員長
- 90. 9 東北音楽センター設立呼びかけ人

#### 井上 晶夫

- 52. 4 七十七銀行へ入行
- 56 七十七従組金融合唱団結成 アコーディオンを始める
- 62. 6 仙台合唱団第1回演奏会伴奏
- 62. 8 金融合唱団イスクラ発足
- 64. 4 音楽センターアコーディオン教室開講
- 66. 1 宮うた協議会新発足し事務局長
- 66 仙台合唱団に研究生を経ず入団
- 66. 2 総会で委員になる
- 66. 3 若生勝代と結婚
- 66. 12 団総会で委員
- 67. 2 宮うた協総会で事務局長
- 67. 4 宮うた祭典財政部長
- 67 転勤のため活動団員となる 塩釜合唱団など伴奏
- 78. 10 宮うた祭典講評委員
- 87. 7 団友会結成呼びかけ人
- 88. 10 うたごえとアコーディオンの夕べで演奏
- 89. 11 日うた祭典で伴奏
- 90. 1 東北うたごえ代表者会議で専従決意表明
- 90. 8 七十七銀行退職

- 90. 10 東北音楽センター設立され専従となる
- 90. 11 東北造船企画会議参加
- 90. 11 山形のうたごえ祭典でアコーディオンソロ

菅原 宏子→高橋 7期生

- 60. 10 7期生として入団（中央印刷）
- 63. 1 第2回うたごえ幹部学校参加
- 63. 2 総会で常任委員
- 64. 2 総会で委員
- 65. 7 総会で常任委員（組織部長）
- 65. 10 中央合唱団東北オルグ担当
- 66. 2 総会で副委員長
- 66. 12 総会で委員
- 67. 2 宮うた協総会で常任委員（組織部長）
- 67. 2 日うた教育者講習会参加
- 67. 8 総会で常任委員（組織部長）
- 68. 1 総会で常任委員（組織部長）
- 68. 8 総会で常任委員（組織部長）
- 71. 5 退団

### 3. 東北のうたごえ協議会と2人専従の時代

1966.5～1969.7 17期生～23期生

東北合唱団会議は日うたから中央教育講師を迎える方針を出し、1966年5月から第2週の月曜福島、火・水曜仙台、木曜盛岡、金曜青森（土・日曜は希望地）とレッスンが始まり、奈良恒子が来仙教育者となって活動を開始した。教育体制の整備によって、17期生はそれまでの最高の48名が集まり、仙台合唱団は量的にも拡大された。その勢いを受け、東北のうたごえ協議会結成に伴って藤村が東北で活躍するために、団委員会では専従をもう1人増やす方針を出した。17期生であった高橋宏は、東京でうたごえ運動の経験があり、5月に研究生として始まったばかりであったが、2人目の専従になることを決意した。団では1口1000円の債券を発行し、この体制を支え、8月1日より2人専従の時代が始まった。

またこの間、宮うた協事務局長の晶夫や「いずみ」の佐藤健治が研究生を経ずして入団するとともに、宮田など旧団員の復団も計画された。力量ある団員が集められたことにより質的にも活動水準が上がってきた。このなかで高平も復団し、「君は胸をはって」「人のいい恋人たち」ほかの創作活動を展開する。日うた祭典では「返せ沖縄」「祖国」（指揮高平、佐藤健治）で激励賞をとり、日うた総会では小編成のうたごえ行動隊の優秀団体として表彰された。（66. 11）



66年12月の団総会で、宮田委員長、宏書記長の体制ができ、全国中心合唱団常任委員も藤村から宏に交代した。団員が少ないことや、古い団員の指導援助の弱さなどの欠陥を持ちつつも、不十分ながら東北のセンター合唱団として自覚が高まりつつあることが報告された。新委員会では、機関紙部を作り、67年1月から機関紙の定期発行が始まる。(これが後に「やくしん」と名称が付けられ、仙台合唱団の正式な機関紙の名前になっていった。67.4) 67年3月の総会では、常任委員会の請負の傾向はありつつも会議の定期化がかちとられたこと、1年間で団の倍加が達成されたことが報告された。郷土部が作られ、うたの掘り起こしなども取り組まれていった。その後教育部長(房)と副委員長(宏子)の負担が過重となり、健康や家事の問題を抱えていたため、7月に臨時総会を開き、藤村が委員長に復帰し、副委員長宮田、書記長宏、のほかに、書記次長として小住芳枝(ネコ・18期)をおく体制を作った。高平が委員となり、教育に関わるようになっていった。また直後の宮うた協臨時総会で宮田は事務局長となる。

宮うた協は市内合唱団合同発表会(67.4、68.3)や渡辺昌子を呼んでの日曜講座(68.4)、うたごえ教室(68.2)など教育活動を展開していった。その影響もあり特に合唱創作発表会の参加団体が増加していった。67年総会では結集サークル52を数え、恒例的な行事消化ではなくて運動として明確に適用するよう各サークルの意識面の強化を図ることが課題となった。この間アコーディオン教室が発展し宮城アコーディオン協議会が発足(66.3)、保母歌う会(67.8)、柴田うたう会(67.12)などが結成され宮うた協に加盟していった。68年総会時の加盟サークルは、D51、翠生会、木曜会、塩釜合唱団、スクラム、アコ協、保母、あぶくま、ポプラ、国鉄ひばり合唱団、仙台合唱団、坂うたう会の12団体と2個人であった。(木曜会はその後発展的に解消し「自治体合唱団いぶき」となった。=68.2) 68年からは県北で栗原のうたごえ祭典も始まった。第1回祭典では若柳高校生の祭典参加を巡って、教育委員会からの干渉などもあった。また、68年7月には世界平和友好祭(ソフィア)に宏を送るカンパ活動が始まり、短期間で宮城のうたごえ始まって以来という40万円を達成(仙台合唱団は19万円)している。

東北のうたごえ祭典は、仙台-秋田-山形-盛岡-福島-青森-仙台と開かれていったが、第5回の福島祭典(46団体参加)からは日音協の影響を受けた団体もあり、統一は困難になっていった。その後に開かれた第2回全通みちのくのうたごえ祭典(仙台市公会堂=67.3)では、宮うた協に協力要請があったにも関わらず日音協問題でアコーディオン協議会が要請を拒否、①日音協の方針を押し付けない②宮うた協の活動、挨拶を認める③宮うた祭典に全通宮城地本が協力する方向を明らかにする、などの確認をとって協力するという事態もあった。第6回青森祭典では、歌いたいすべての仲間を開かれた祭典にするため、「日うた祭典とは別個のもの」という確認をとったり、「一致できるスローガンで祭典を開く」、「独自活動を保障する」など基本的性格5項目確認を行うなどの努力もあったが、この5項目を楯にとっての分裂工作も引き起こされた。常任委員会が東北6県の合意を前提とし、日音協押し付けを排除する方針を持った結

果、全林野労働組合が常任委員会から脱退するまでに至った。そのため合唱発表会の出場は16団体に減少した。(祭典は1100名)宮城では日音協による「反戦のうたごえ集会」などが開催されるなど、分裂は決定的になっていった。(67.10)68年の宮うた祭典では、労評青婦協や社青同は実行委員会にも入らず呼びかけ団体にも入らないという対応をとっていった。(後に労評青婦協は後援となり、筑前琵琶の人間国宝館山甲午を実行委員長として、33団体1300名で成功させた。)

団員が着実に増え、演奏力も高まってきていると評価をうけるなかで、高平は歌劇沖縄制作委員会より推薦され中央に派遣され、制作にも関わった。(67.9)68年8月の臨時総会で高平が教育部長に就任、団のオリジナル曲を中心とした歌集「春の使者」を発行した。その年の日うた祭典合唱発表会では中心合唱団の部で「春の使者」「バイカル湖のほとり」(課題曲)「ベトナムに送るまい」(同)を発表し、激励賞をとる。(指揮高平)

12月の団総会では、中央講師のレッスン、中級テキストの学習、センターの拡張などによって小編成公演活動が前進したこと、月1回のうたう会活動も100名前後で定着したことが報告された。しかし大演奏については、「うまくなったが感動が薄い」という評価もあることが指摘された。これらの前進の中で、7年ぶりに第2回演奏会が計画された。最初は団としての取り組みは弱かったが、自発的に団発表実行委員会の集まりがもたれて、高平を企画部長とする演奏会実行委員会の体制が整っていった。第2回演奏会は43名の演奏参加で公会堂に700名を集めて開催された。(69.4)藤村はこの演奏会の後に退団し、再び専従は1名となる。

#### 宮田猪一郎 4期生

50. 4 東京で電通に就職、定時制高校在学

中央合唱団研究生に入る

58. 4 転勤となり仙台合唱団4期生として入団

58.11 全電通塩釜分会コーラスおたまじゃくし結成、代表となる

以後、電通および塩釜地域で活躍

60. 3 6期生教育担当

60. 6 安保闘争うたごえ行動隊伴奏で活躍

60. 6 団活動者会議参加

その後仙台合唱団を一時休団

64. 5 電通のうたごえ仙台祭典事務局 仙台電通合唱団指揮

65.10 宮うた行動隊結成し責任者としてオルグ活動

65.12 復団

66. 2 団総会で委員になる

66. 3 東北地方郷土活動者会議参加

66. 4 全国創作活動者会議参加

66.12 団総会で委員長になる

- 67. 3 団総会で委員長
- 67. 8 臨時総会で副委員長
- 67. 8 宮うた協臨時総会で事務局長になる
- 68. 1 宮うた協総会で事務局長
- 68. 4 メーデー前夜祭「川岸闘争構成詩」担当
- 68. 5 宮うた祭典事務局長
- 69. 2 第2回演奏会事務局長
- 69. 3 うたごえ喫茶「仲間」開店し支配人
- 69. 7 団総会で委員長になる
- 70.12 退団

高橋 宏→佐藤 17期生

- 66. 5 東京でうたごえ運動に参加、職場が仙台に変わり17期生として入団
- 66. 8 専従となる
- 66.12 団総会で書記長となる（以降退団まで）
- 66.12 藤村と交代して全国中心合唱団常任委員となる
- 67. 4 宮うた祭典組織部長
- 67. 9 宮うた祭典合唱創作発表会審査委員
- 68. 6 宮うた祭典実行委員
- 68. 7 日本のうたごえ代表団事務局長として世界平和友好祭（ソフィア）に派遣
- 69. 1 二分脊椎のため1週間休養
- 69. 4 第2回演奏会事務局
- 69. 4 宮うた祭典事務局長
- 69. 9 東北のうたごえ祭典に専従として派遣
- 70.10 東北のうたごえ祭典に専従として派遣
- 71. 2 過労で入院
- 71. 5 一身上の都合で突然退団

### 第3節 音楽運動としてのうたごえ運動へー 70年代の活動ー

#### 1. 歌劇沖縄の衝撃と専従の消滅

1969.7～1971.5      24期生～26期生

藤村退団後の団体制は、菅原悟（ニキ・17期）が副委員長で入り事業部を担当し、勝代がうた協担当となる。新たに研究生教育部、うたう会部などが設けられた。うたう会部は、宮田が音頭をとって作ったうたごえ喫茶「仲間」（毎週月、木曜日のレッスン終了後、レッスン場にも使われていた利休ビル4階の事務所で9時から10時50分まで行っていた＝69.3より）を発展させ、一般の客を呼んで夕方6時からうたごえ喫茶を毎週日曜日に定期的に開催していった。その後利休ビルを引っ越すまで20年近く続けられた「カマラドイ」の始まりである。名称の由来は「カマラドイ」（エスペラント語で「仲間」を意味する）というカクテルをメニューに出していたことによるが、その名の通りうたごえ運動の大衆的な普及の場となっていった。（69.7より）「追われる活動」から「追いかける活動」をめざし、「目標は関西合唱団」という声が見えるまでに到達した。事実、70年の日うた祭典では、D51合唱団や宮城厚生協会準看護学校の活躍、70年に結成された民族歌舞団ほうねん座との郷土の演奏、高平の創作曲などで「仙台と関西が中心となった祭典」と言われたのである。

この時期の大きな衝撃は、日本のうたごえ運動が総力を挙げて取り組んだ歌劇沖縄の公演である。仙台での開催は青森－秋田－盛岡－福島と続けられた第1期の最終公演ということもあって、東北では最高の1800名で成功させた。オーケストラは新星交響楽団、指揮に外山雄三というプロの音楽家との競演もあり、初めての大合唱曲、演技、うたごえ以外の仲間とのふれあいなど、「70年代型の活動」が要求されたものであった。実行委員長は館山甲午、佐久間が事務局長で活躍した。演奏に関しては、高平が創作グループに参加したほか、勝代がオペラ合唱団の責任者となり、東北大混成合唱団、グリーンウッドなどをオルグして120名のオペラ合唱団を組織し、レッスンには日うたから渡辺昌子や井上頼豊が参加した。（70.6）また、事務局次長は労音の成田憲治であった。仙台合唱団は民主的音楽運動の連帯の立場から労音例会の成功をよびかけており、69年12月例会「あの人は帰ってこなかった」の合唱隊を高平が指導したこともあり、その後高平を常任指揮者とする労音合唱団が結成（70.1）され、うたごえとの協力が深められていた。総括においては、この新しい活動を全団残らず団結してやりきったことから、「音楽的な力、感動に触発され団の団結は強まりつつあること」が指摘され、「うたごえ運動は音楽運動であること」を再認識させられた経験であり、「これはオペラ仙台公演が与えたショックであった」と述べられている。アコーディオン協議会で活動していた佐久間は、歌劇沖縄の取り組みの後、本格的に仙台合唱団への復団の準備を始めた。

高平は65年頃から清瀬保二に師事して作曲法を学び、「ベトナム参戦国の母や妻に」「春の使者」などを発表、69年には「さよならもいえないで」で日うたから創作69年

賞を受けていたが、オペラ公演後に開かれた第1回保母のうたごえ祭典（仙台・70.9）で、組曲「私たちの青春」ほかを創作したほか、「チェロのための小品」を発表、創作70年賞も獲得した。チェロ曲は、団が主催して団演奏の入らない初めての音楽会「井上頼豊チェロの夕べ」（71.2）で演奏され、団の主催する音楽会の記事が初めて河北新報に載るなど「市民権拡大」の一つとなり、これは日本のうたごえ運動の中でもユニークなものとして評価された。団としては財政問題からの企画であったが、70年代の音楽運動が国民音楽の創造という課題を持っているとするならば、よい音楽を自分自身で聴く必要があり、クラシックから学ぶ必要を団員に感じさせるものとなった。

70年12月の団総会では、70年代のうたごえ運動における中心合唱団の任務の課題が検討された。オペラ公演以前では「歌で闘っていく」「中心合唱団としての責任」「うたごえ活動家は文化の担い手」の自覚バラバラであったが、公演以降は、滞納でストップされていたうたごえ新聞の再開、常任委員会の団結、うたごえ運動とは何かの学習、みんなが作っていくレッスンなどが自覚的に追求されるようになり、「圧倒的な感動を生む演奏は何によって作られるか」という60年代の提起に、「いきいきと積極的にレッスンし歌うこと」という回答が教育部総括という形で示された。そこから、150名の団、4人の専従を結集させるという70年代初頭の課題＝3カ年計画を打ち立てていった。この総会で家庭と職場の事情から退団した宮田の後をうけ、ニキが委員長、高平は副委員長となり、71年2月からは日うたから小磯昭子がレッスン指導に入った。（71.6まで）

一方、日音協等の分裂の渦中にあった職場サークルはそれぞれが組織を拡大していく上での矛盾を抱えていた。D51合唱団は斉藤弘太（8期生）を指導者として、70年日うた祭典合唱発表会職場の部1位（発表曲「労働者はいいぞ」、「夜」－高平曲）を獲得するなど着実な前進を見せていたが、郵便雑唱団や晶夫も含む職場活動家の弾圧裁判を抱えていたイスクラなどが困難な状態となっていた。その影響もあって、職場団員からは、仙台合唱団が大きくなることと研究生が職場のサークルでうたごえ活動家として力を発揮することに関しての実践上の疑問が提示されていた。69年5月には職場合唱団「いぶき」から、研究生に送り込んだ団員が仙台合唱団での活動が主となってしまい職場で活動できなくなっていることを、仙台合唱団の「入団セクト主義」として抗議文が提出されたこともあった。また、「70年代型活動」が従来とは違うスタイルを作り出してきつつあったことから、現代化、大衆化をめぐる疑問も引き起こされてきた。例えば、保母祭典の取り組みなどをめぐるでも、職場のうたごえサークルなどで十分な意見交換や意義を深めることなく、企画だけが先行していつてしまう状況などに対して仙台合唱団内部からの批判もあった。

こうした中でも相変わらず財政問題は深刻で、うたごえ新聞の赤字で読者に断りなく配布ストップになったりしていたが（70.4～70.10）、センター財政、宮うた祭典財政も同様な状態であった。また、東北のうたごえ祭典も赤字を抱えていた。日音協の分裂後も69年盛岡（1300名）、70年秋田（1400名）と開催され、仙台合唱団は東北のうたごえ運動のセンターとしての自覚から、宏を専従に送って成功のために奮闘した

が、参加サークルは減少していた。各地の中心合唱団が組織拡大が進まないなどのこともあったが、結局は財政問題で祭典の開催自体が困難となっていたのである。

そして、ついに71年5月に、全国中心合唱団会議常任委員、東北うた協事務局長、宮うた協事務局長、仙台合唱団書記長であった宏が、一身上の都合ということで事務処理を行わず団を去るという事態が引き起こされてしまった。これによって専従体制は崩壊し、専従のいない団活動となる。仙台合唱団ばかりでなく、それぞれのうたごえ運動の組織が、専従の宏を中心として少数の活動家に集中した活動を行っていたという問題もあって、大きな痛手を被った。東北のうたごえ運動においても、専従がゼロとなったことによって、東北祭典は70年以降は開催されず、また東北のうたごえ協議会も崩壊していった。

菅原 悟（ニキ） 17期生

- 66. 5 川崎市より転勤し17期生として入団（東北特殊鋼）
- 66.12 総会で委員になる
- 67. 2 鹿島台で郷土のうた掘り起こし
- 67. 5 全国郷土のうたとおどり活動者講習会参加
- 69. 7 総会で副委員長 事業担当
- 70.12 総会で委員長
- 71. 5 臨時総会でうた協担当になる
- 72. 5 総会で委員長
- 73. 2 長町地域でサークル「しおさい」を発足させる
- 73. 5 三役を降りて教育担当 副指揮者になる
- 75. 6 第6回演奏会で指揮、ソロ 以降演奏会で指揮
- 76. 1 高平リサイタルで指揮
- 78. 9 総会で団長になる
- 78.10 宮うた祭典講評委員
- 79. 2 日うた全国協総会参加
- 79. 7 総会で団長
- 80. 6 総会で副委員長（副指揮者）
- 81. 3 総会で副委員長
- 82. 4 総会で副委員長（創造委員長・以降正指揮者）
- 82. 5 古川コンサート企画部長
- 83. 5 総会で副委員長
- 83. 9 40周年記念音楽会企画責任者
- 84. 4 総会で演奏教育部長
- 84. 4 全国総合教育講習会に参加 指揮者・教育者のパネラーになる
- 84. 6 東北うたごえ交流会で合唱構成松山事件を指揮
- 84. 9 日うた東北合同レッスン呼びかけ人

- 86. 6 団総会で副委員長 宮うた委員になる
- 87. 7 団員指揮研究会で講師
- 89. 3 団総会で副委員長を交代し正指揮者
- 90. 5 東日本教育者講習会参加

## 2. 専従のいない団体制づくり

1971.5～1974.3 27期生～30期生

宏がいなくなってすぐ開かれた臨時総会(71.5)では、新体制で専従のいない団を支えていこうと決議し、宮うた協の活動団員（アコ協所属）であった佐久間が復団するなど、新しい体制が始まった。書記長は当面榎波政子（エナ・24期＝財政担当）と小野秀徳（オノ・23期・D51＝うたごえ新聞担当）の2人で代行し、団内の組織はネコのほかに鎌田美佐子（カマ・24期）、やくしん部に青田卓也（山キチ・20期・D51）、新しく部になったカマラドイの責任者に市川孝子（イッチ・23期）、研究生教育部に谷井利子（トコ・21期・国公）、うたう会部に引地恒一（23期・D51）など常任委員に新しいメンバーが入った。さらに、新たにアコ教育部を設け佐久間が担当した。また、この時期に房と宏子は正式退団となった。

宮うた協も5月に総会を開き新しい体制を構築していった。仙台合唱団からは佐久間、ニキ、オノ、後藤寿子（トシ・23期・郵便）を委員として出し、総会で佐久間が新会長となった。副会長もD51から選出されているとはいえ仙台合唱団常任委員の引地となったため、事務局長に対しても仙台合唱団に要請があったがこれは断らざるを得ず、事務局長は選出されなかった。残りの委員はD51、「いぶき」、保母の3名のみで、体制的にはかなり弱体化した。仙台合唱団の1年後の総会（72.5）でも、「送り出す責任のあったうた協事務局長問題を放置し、県内うたごえ運動の中心であるうた協に大きな関心を払わなかった」と総括されている。その後宮うた協は、宮城県学生自治会連絡協議会（県学協）と連帯し学生の中に運動を拡げていったが、郵便、電通、いぶき、イスクラなど職場合唱団が活動困難となり抜け落ちていった。

72年5月団総会で、トシが書記長に就任し体制は一応安定した。「うた新を購読する」という規約改正をし、常任委員会より選出された委員による芸術委員会や書記次長を作った。「芸術委員会は団の方針を主に芸術面で具体化し、総会、委員会、常任委員会に反映していく任務」と規定され、音楽運動としてのうたごえ運動の構築には不可欠な団内組織として盛り込まれたものであった。その直後には、福島大学でうたごえ運動を経験していた「青春」の作曲者地主幹夫が研究生を経ずして入団し(72.5)、書記次長の役割を果たしていった。11月の臨時総会で、団の20周年記念演奏会に向けた方針を決定することになるが、ここで、高平委員長、佐久間副委員長、トシ書記長、地主書記次長という三役体制が確立する。73年5月総会では、カマが中心合唱団常任委員、勝代が日うた常任委員となった。

72年からは毎年大ホールでの演奏会を開催していった。これは、うたごえをはっき

りと音楽運動として位置づけた日うた第7回総会方針(74. 2)を先取りする計画であり、新しい時代に向けての取り組みでもあった。研究生が年2回のペースで修了し、着実に入団していく体制を作り出したことが、この取り組みを支えていった。第3回演奏会(72. 2)は、2ヶ月の取り組みであったが初めて県民会館大ホールを使って開催された。第2部には振り付けが入ったほか、第3部には高平作品集でワンステージを作った。全体的に「演奏力の市民権を得るにはまだ相当の努力が必要」と総括されたが、伴奏に初めてギターを用いたり、フォーク、ゴーゴーなどが入るといった新しい内容がもりこまれた。第4回演奏会(73. 3)は20周年記念であり、県労評、仙台地区労が支持団体となったほか、宮城教育大学の今井邦男らの支持もあった。この演奏会は県知事選挙の革新統一候補を団も応援するという中で開催された。「平和で健康なうたごえを広げることと革新の流れとは結び付いている」という団挨拶にもあったとおり、知事選とともにやりぬいた演奏会であった。ベトナム支援、荒木栄集、郷土など20周年の歴史を歌であらわす企画がもりこまれたが、20年活動しているのは団員では1期生の高平1人ということもあり、経験の薄さは取り組みの弱さにもつながっていた。第5回演奏会(74. 2)は計画の段階からうたごえをはっきりと音楽運動として位置づけたものとなった。「夜明けのうた」のオープニング、「下町の太陽」などの歌謡曲路線、ラテン・フォークなどのステージが大きな支持を受けた。また、郷土の取り組み、伴奏にうたごえ以外の団体(山元町ニューポップス)を入れる試みなどがなされ、それぞれ市民権拡大につながっていった。井上頼豊は「前年にまさる意欲的な選曲は“新しい時代に向けての新しい歩み”といえる」というメッセージを寄せた。特に創造面で団はやっと混迷の中から糸口を見つけ出したと総括されている。

日うた祭典での合唱発表は72年に中心合唱団の部で2位次席というこれまでの最高をとり(D51は職場の部1位)、73年は時間オーバーで選からもれたものの2位のトップという評価を得た。(発表曲「わが母のうた」「青春」)日うた6回総会では、全国協議会幹事長の杉浦敏郎論文「73年日本のうたごえ祭典に対する提言」で「昨年から前進に次ぐ前進の仙台合唱団」と評価され、7回総会では、毎週みんなうたう会を全県的に普及、うた新拡大、演奏活動前進、地域サークルの援助などが評価され、年間優秀団体として表彰された。

宮うた協の組織では職場サークルに代わって、石巻地域うたごえ協議会(72. 12結成)、古川うたう会(栗原うたう会が発展)、不忘サークル(白石市)、「どらごえ」(山元町)など県南、県北地域のサークルが加盟していった。72年の宮うた祭典(実行委員長に宮教組の横谷善雄委員長)は初めて古川市で開かれ、県北地域サークルの組織化が進んだ。(72. 10)仙台合唱団も初めて石巻市で公演を行った。(73. 7)73年には、「はぎ」(宮教大)、「やまびこ」(寮生)、「おたまじゃくし」(福祉大)の学生サークルがあいついで結成されていったほか、名取ひまわり、岩沼大空、山元町どらごえなどによる仙南のうた協(73. 11)も発足した。73年の祭典は石巻で開かれ、仙台合唱団が関わったオルグも35回を数え、学生のうたごえの参加や石巻うた協の奮闘があり800名以上が集まったが、専従なしの限界もいわれていた。一方、東北のうたごえは、講習会



を開催したものの(71. 5、72. 3)、その後交流は一時途絶えてしまった。

74年3月総会では、3カ年計画の総括がなされた。「70年代やくしん」の初頭に専従を失なったことによって幹部の弱体化を生み、団の前進を阻むなど社会的条件はあったが主体的要因に問題があること、設定自体が甘く、「70年代に向けた夢」の要素が大きくそれをやり抜く力量がついて行けなかったなど、計画としては失敗したことを認めざるを得なかった。その結果、社会の発展の情勢に著しく立ち後れてしまったが、幹部の団結と積み重ねがいかに大切かが、3か年の歴史の教訓であると総括された。弱点として、幹部集団の定着、音楽的力量、各部の前進などが指摘された。団体制では新たに副委員長に穴戸正子（マー・24期）、地主が書記長になり、菅原正春（ボーヤ・25期）が書記次長となった。常任委員には、トコ、カマ、勝代のほか宮沢満里子（28期）が入った。

#### 佐久間和男 4期生

- 58. 4 4期生として入団（湯浅電池）
- 59. 4 総会で委員になる 団外の組織で活躍  
以後、活動団員としてアコ教室等で活動
- 70. 6 歌劇沖縄仙台公演事務局長
- 71. 1 復団
- 71. 5 新体制で委員になる アコ教育、宮うた協担当
- 71. 5 宮うた協総会で会長になる
- 72. 11 総会で副委員長
- 73. 5 総会で副委員長
- 74. 3 総会で副委員長
- 74. 10 宮うた祭典実行委員長
- 75. 1 総会で副委員長
- 75. 11 高平作品集出版責任者
- 76. 1 高平リサイタル事務局
- 76. 1 うたごえ新聞仙台支局代表となる
- 76. 4 総会で副委員長
- 76. 9 宮うた祭典実行委員長
- 76. 12 宮うた実行委員会結成しうた協再建の活動
- 77. 5 総会で副委員長
- 77. 9 郵便祭典地元実行委員会事務局長
- 78. 5 宮うた協再建準備会会長
- 78. 9 臨時総会で副委員長 普及委員会責任者
- 78. 9 宮うた祭典事務局長
- 79. 1 東北のうたごえ代表者会議参加
- 79. 3 宮うた協再建準備会会長

- 79. 6 宮うた協再建総会で会長になる
- 79. 7 団総会で常任委員
- 80. 3 団総会で委員 うたごえ新聞、宮うた担当
- 80. 5 宮うた協総会で会長
- 80.10 電通祭典（仙台）事務局担当
- 81. 9 保母うた祭典（仙台）事務局担当
- 82.10 国鉄祭典（仙台）事務局担当
- 83. 8 宮うた協総会で会長
- 84. 4 団総会で宮うた担当
- 84. 9 うたごえ新聞及びセンター財政に関して団に申し入れ
- 85. 1 休団
- 85. 4 バンと連名で宮うたサークル代表者会議の呼びかけ
- 86. 2 バンと連名で宮うたサークル代表者会議の呼びかけ
- 88. 5 うたごえとアコーディオンの夕べ副実行委員長
- 90.11 本人の申し出により除籍

#### 地主 幹夫

- 71 福島大学で学生のうたごえ運動に参加 「青春」を作曲
- 72. 5 仙台合唱団に入団
- 72.11 総会で書記次長になる
- 73. 4 メーカー作戦本部長となり活躍、全国に誇る成果を上げる
- 73. 5 総会で書記次長
- 73. 7 うたごえ新聞拡大、研究生100名募集推進本部長
- 74. 2 日うた7回総会参加
- 74. 3 総会で書記長になる
- 75. 7 副指揮者
- 76. 4 退団 小学校教員となる 多賀城合唱団で活動
- 77.11 宮うた祭典に県北合同を組織して参加・指揮
- 84.12 てしがわら青年婦人の集い演奏に協力
- 85. 7 44期創作合宿に参加
- 85. 7 長町まつり演奏に伴奏参加
- 85. 9 アコーディオン教室再会（86.7まで）
- 85. 9 松山演奏会協力
- 85.11 日うた祭典創作発表会で作詞作曲した「ぼくらのふるさと線」指揮
- 88. 1 民主教育を進める県民連合集会演奏で指揮
- 88. 3 復団し副指揮者となる
- 89. 5 休団

- 89. 8 平和友好祭演奏に伴奏参加
- 90. 2 春よこい平和よこいみんなで楽しく歌いましょう会で伴奏

後藤寿子（トシ）→川村 23 期生

- 69. 5 23 期生として入団（簡易保険局）
- 70. 12 総会で委員になる
- 71. 5 総会で委員（組織・宮うた協担当）
- 72. 5 総会で書記長になる
- 74. 3 出産・育児のため書記長を地主と交代
- 75. 1 再び書記長になる
- 77. 9 第 11 回郵便のうたごえ仙台祭典実行委員
- 79. 12 第 9 回演奏会で司会

### 3. 日うた新方針の実践

1974.4～1979.12 31 期生～36 期生

日うた 7 回総会で提起された方針に基づいて、第 8 回総会で日うた全国協の新規約が確定された。(75. 2)それは、運動の狭さや偏った傾向を改め、大衆的で民主的な音楽運動を構築することであった。仙台合唱団は宮城のうたごえ協議会と一緒に 8 回総会でも表彰されたように、この路線に従って運動を展開していった。75 年 1 月総会では創造委員会が設けられ、高平指揮者のもとに、ニキ、地主、が副指揮者となったほか、佐藤健治、宮沢満里子、関口秀生（29 期）などの教育者を生みだしてきた。日うたからの講師（壇上さわえ、福田由美子、今村肇）による声楽レッスン(75. 3～)を重視し、教育部で位置づけるようになった。

この時期の特徴は、77 年まで毎年 1 回ずつの演奏会が 1000 名以上の規模で開催され、団の創造路線を確立していったことである。第 6 回演奏会（75. 6）は、山形交響楽団アンサンブル（15 名）というプロオーケストラを迎え、単一合唱団の演奏会としては形の上でも誇れるものであった。同時に電力ホールに 1200 名（学生を 100 名以上組織）を集め過去最高のものとなった。原爆企画（合唱構成ひろしまの空）が好評で、音楽と社会の問題を選曲と演奏内容で明らかにしてきたこと＝仙台にはこのような合唱団はないという自覚や、選曲の幅を広げ、70 年代の創造課題を発展させたことなどが総括された。第 7 回演奏会（76. 7）も山形交響楽団を迎え、京都ひまわり合唱団の山本忠生と高平との指揮者交流などの試みで、第 6 回と同様の企画を持った。（電力ホール、1100 名）しかし、自分達の作曲、うたう会を多くの団員で作り上げたという成果はありつつも、日常の普及と演奏会の結び付きが曖昧で創造面でも第 6 回を越えたものにはならなかったと総括されている。第 8 回演奏会は、「土と汗・労働」「真実を守る闘い」

をテーマに、名古屋青年合唱団の林学の客演指揮、仙台マンドリンクラブの共演などで開催され、うたごえの中ではあまり歌われたことがない組曲「山芋」などに取り組んだ。3年連続1000を越える成果を上げ、合唱力量も市内の一般合唱団以上に認められてきたが、「うまくなったが感動が薄い」という評もあった。

団内では、31期生あたりから学生が増えてきたと同時に、活動家としてではなく、音楽としてうたごえに参加してきた人が多くなったことが指摘されるようになっていた。かなりの団員が声楽レッスン（当時受講料1回2500円）を受けていることもあって、合唱の力量に関してみると、日うた祭典合唱発表会では74年第2位（創作宮城合同「ほたる」入賞）、75年同、77年3位、78年同（創作音楽会宮城合同優秀団体で表彰）という着実な成績を上げてきていた。これらの成果の延長線上に、高平の創作曲集発行（75.11）と同日サイタル（76.1）、同レコーディング（77.1）が行われた。この一連の取り組みに関しては、宮城のうたごえ20年の歴史から学び達成点を作品を通じて示すこと、宮城のうたごえ全サークルの共同事業として演奏力量を高めサークルの交流をはかること、地元専門家を中心に専門家の協力への一歩とすること、高平作品から学び、彼への30周年に向けてのはげましの音楽会とすることを基本方針にして、宮城のうたごえ全体で取り組まれた。これはまた、日うた7回総会方針の団における発展であると同時に、個人発表会やレコード出版という形をとったもののうたごえと団がかち取った成果であるとされた。

団内の体制では、76年4月に地主が退団することにより、新たに「たんぽぽ」の作曲者堀越浄（ジョー・32期・東北大生協、寮生のうたごえ「やまびこ」出身）が副委員長、勝代が書記長に復帰、書記次長にチョー（32期）が入った。常任委員には、74年から小笠原千英（メダカ・25期）、白坂とし江（ミヤ・29期）、75年から加藤けい子（オケイ・26期）、76年からは今村裕（ゴエモン・30期・D51）、相沢昇（ポニー・27期）、河東善雄（26期）、77年からは吉田真智子（マッヂ・27期・郵便）などが入った。宮沢、カマ、トシ、ミヤ、メダカなどの女性団員は出産、育児等をかかえ休団する事が多かったが、困難団員に対するL班などを作り、参加、復帰を追求していた。センターを改造して育児室を設け、保育担当者をおいてレッスン参加の拡大をはかる試みもあった。（74.7）

研究生、団員が増え、演奏会が成功するなど団の力量が定着する中で、「演奏会中心主義」や「団内民主主義」に対する批判も起こるようになってきた。うたごえの他のサークルからは、仙台合唱団に対する要求として、職場、学園でがんばる活動家の養成、早いサイクルでの研究生養成、群を抜いた力量、サークルに対する指導や分教室をつくること、地域にあった独自性を認め団のやり方を押しつけないことなどが提起されていた。

78年8月総会は、日うたから音楽センター副理事長の木下そんきも参加し、情勢の項目をみんなで調べて学習するなど47頁に及ぶ議案書によって、団の抱える基本的問題を討議した。そこでは、いまだかつてなかった研究生修了、30回以上にわたる演奏活動、郵便祭典や演奏会の成功、カマラードイの前進、声楽3教室の積み重ね、などの

成果を持ちつつも「うって出る普及とサークル倍加を結び付ける」活動の停滞、団内団結・運営の民主的強化の後退、力ある活動家を生かしていくこと、演奏会と普及・団建設のつながりができなかったことなどが総括された。その結果、芸術委員会を創造委員会に変え、委員長を団長とすることを決めたほか、綱領規約検討委員会も発足させた。また、450万円を目標とする東京の音楽センター建設カンパ活動も提起された。三役は留任であったが、直後の方針総会(78.9)において、ジョーが抜け、ニキが団長、副団長に佐久間(普及委員長-うた新部、うたう会部、サークル対策部担当)、勝代、宮森勝久(弁士・34期)、書記長はチョー(総務委員長-組織部、財政部、やくしん部担当)となり、村上仁(カルビー・35期)が書記次長となる。高平は創造委員長(教育部、研教部担当)となり、常任指揮者=団委員長という体制をやめた。しかし、78年は演奏会は開催できなかった。団費滞納が31万円にのぼり、音楽センターカンパが450万円も強力に集められ79年5月に目標を達成したのに対して、団内の結束力は強まっていかなかったといえる。班組織も事実上解体状態であった。

79年7月総会では角田繁夫(カク・30期・電通)が副委員長となり、宮うた担当の勝代、佐久間は三役を降り宮城のうたごえ協議会再建の活動を中心的に担うことになった。また書記次長は我妻久司(パーマン・35期・郵便)になり、カルビーは教育活動に回るなど、新しいメンバーの参加で団運営の体制の分業化が進んだ。機関紙「やくしん」の復刊(78.5)や月1回のお誕生会(78.1~)など団内交流を意識的に作り出す取り組みもみられた。創造委員長の高平は常任委員会には随時参加という形になった。その後高平は、電通のうたごえによる組曲「自由なる朝へ」の作曲などに取り組み、79年日うた祭の全国合同で指揮を行った。(79年祭典では、仙台合唱団中心合唱団の部第3位、D51職場の部第1位、仙音アコール地域の部激励賞=79.11)

#### 堀越 浄(ジョー) 32期生

- 71. 4 東北大学でうたごえ運動に参加 創作を始める
- 74.11 寮生「やまびこ」創設
- 74.11 仙台合唱団32期生として入団(東北大学生)
- 75. 4 東北大学生協に就職
- 76. 4 総会で副委員長になる 研究生教育担当
- 77. 1 「たんぽぽ」うたごえ新聞に公表
- 77. 5 総会で副委員長
- 78. 9 臨時総会で三役を降りる

#### 長 朝夫(チョー) 32期生

- 70. 4 福島大学でうたごえ運動に参加
- 74.11 仙台合唱団32期生として入団
- 76. 1 高平リサイクル事務局
- 76. 4 総会で書記次長となる

- 76. 9 宮うた祭典合唱団委員長
- 77. 1 高平レコーディング事務局
- 77. 5 総会で書記次長
- 78. 5 機関紙「やくしん」を復刊させる
- 78. 9 臨時総会で書記長 総務委員会責任者として、組織、財政、機関紙担当
- 79. 1 カルデパーチョ発足
- 79. 7 総会で書記長
- 80. 6 団総会で書記次長（教育担当）
- 81. 2 書記長代行
- 81. 3 団総会で書記長
- 83. 9 宮うた委員となる
- 83. 11「永遠のみどり」事務局長
- 85. 4 団総会で書記次長（機関紙部長、宮うた委員）
- 86. 6 団総会で常任委員（機関紙部長、宮うた委員）
- 87. 3 団総会で運営委員（機関紙部長、宮うた委員）
- 89. 10 主婦団員レッスン指導
- 90. 8 団臨時総会で副委員長（宮うた担当）

## 第4節 80年代の運動

### 1. 宮うた協の再建と東北のうたごえ交流会の運動

1980.1～1982.3 37期生～40期生

仙台合唱団が研究生を着実に修了させ、量的にも質的にも前進していった一方、宮うた協は75年頃から職場サークルの停滞を伴って崩壊状態になってきていた。「70年代型の活動」は、中心合唱団以外のサークルではそれぞれに受け止め方も異なっており、従来の形での活動では前進しきれないものをもたらしていた。それ以前においても、何度か形作られた協議会組織は日常的な運動組織というよりも、交流・連帯を中心として、イベントでつながっていたという側面が強いものであったが、この時期にそれらの矛盾が組織としての課題という形で噴出していったのである。

宮城のうたごえ運動をリードしてきた職場のサークルは、以上の課題において多かれ少なかれそれぞれのとまどいを見せていたし、新しくできた地域のサークルは地域の中心合唱団としてあゆみ出すためには経験、力量それぞれが欠けていたといえよう。その中で、唯一この時期組織化が進んだのは学生のサークルであった。60年代後半から学園民主化闘争が進み、多くの大学において学生自治会の結成や再建が図られていた。全県の学生自治会組織である宮城県学協や、学生運動の中核部隊となった宮城県学生寮自治会連合が結成され、70年代に入って量的にも前進した運動を生み出していた。学生のうたごえの出身者は、仙台合唱団の歴史においても、初期の東北大学翠生会メンバーや、専従になった藤村など重要な部分を占めてはいたが、量的な比重の増大という意味では70年代後半からが特徴である。仙台合唱団の運動だけではなく、宮城のうたごえ運動、祭典のあり方を巡っても大きな影響を及ぼしたことは事実であろう。

まずそれは、70年型という新しい宮城のうたごえ祭典の実施形態を巡って現れた。70年代の宮城のうたごえ祭典は、60年代のような多くの労働組合が祭典の時に多数の合唱隊を集め、「決起集会」の形を取るものでなく、日常的な職場の合唱サークルとしての活動の積み重ねが要求された。また、闘いの領域も職場、地域、学園と広がりをつながりを見せており、労働組合のような大量の人数を持つ日常組織を持たない合唱サークルが多くなってきたこともあって、組織化ということをもみれば確実に「動員」ができるなどといった体制はとれなくなってきた。いわば、特に安保闘争後の職場サークルを巡っては、「労働組合が闘うサークルを生み出してきた」という段階から、ある意味では組合内部を含めた干渉・攻撃が始まる中で、闘うサークルが主語となって職場の組織の中に位置づき、さらに地域などの大衆運動に結びつくという方向がみられた時期である。うたごえ運動でいえば、合唱団が合唱（音楽）のサークルとして定着するという質的發展を遂げ、さらに量的発展に向けて活動を展開させていく課題でもあった。

70年代の宮城のうたごえ祭典は2種類の形があった。一つは大音楽会形式の祭典

(70, 71, 72, 73, 74, 76, 78年)であり、この場合は別に合唱創作発表会（日うた祭典の予選を兼ねるもの）を伴った。もう一つは合唱発表会形式のみを行った祭典（75, 77, 79年）である。このうち72年と73年の祭典は地方祭典（古川、石巻）であり、78年祭典は2部形式をとり1部が合唱発表会、2部が大音楽会として同じ会場でとりくまれた（チケットは別）ものであった。大音楽会形式はプロの団体・個人を呼ぶなど予算規模も大きく、会場は1年前から予約せざるを得ない状況で、計画的に取り組まなければ大きな赤字を出す可能性を持つイベントであった。事実、1000名以上を集めることができたのは70年祭典のみであり、後半の3回の大音楽会は組織規模は半減しており、かなりの額の赤字を出していた。隔年ごとに合唱発表会形式になったのは、祭典の企画上のイメージではなくて、大音楽会を開くことのできない主体的力量の問題でもあった。

仙台合唱団が大きくなり毎年1000名以上を集める演奏会を成功させているのに対して、宮城のうたごえ祭典が成功しないという状況は、中心合唱団のあり方に対する批判となって現れた。しかしもう一方では、うたごえ協議会役員となる各サークル代表も仙台合唱団員が多く、ほとんどを仙台合唱団員が占めてしまう結果、宮城の運動が仙台合唱団の体制やスケジュールに規定され身動きがとれないという状態をも示していた。まさに宮城のうたごえ協議会は、仙台合唱団の「団外組織部」の様相を示し、協議会独自の主体性が発揮されないという運動が続けられていたといえよう。仙台合唱団まかせて運営されていた協議会は74年以降総会も開かれず、事実上機能を停止していた。

76年祭典が、佐藤光政や山形交響楽団を呼んで70万円という赤字を出したことにより、祭典に参加したサークルは対応を求められた。直後に開かれた宮うた協再建準備会（76.10）では、「運動によって作られた負債は運動によって返済しよう」という積極的な提起がなされ、新たに宮うた実行委員会（76.12）を結成することによって宮うた協再建の課題が掲げられた。そこでは、宮城学生うた協の結成（75.12）やD51の再建、県北のうたごえの組織化が進むという動きの中で、新しいタイプのサークルの代表者が集められた。佐久間が会長、車田保幸（17期・アコ協）が事務局長となって、宮うた講習会や大交流会、郵便のうたごえ仙台祭典（77.9）などの共同の取り組みを通じて、県内サークルの連帯が模索されることになった。1年以上にわたる独自の活動の積み上げの中で、実行委員会は県内サークルの連帯組織として協議会を再建するというアピールを出し（78.2）、県下27サークルに呼びかけて再建総会を計画した。（78.5）しかし、「連帯組織なら今まで通りでいい」とするサークルが多く再建総会は失敗に終わった。そこで、再建準備会を結成し、さらに1年以上をかけた取り組みの後に（この間には、うたごえ酒場バラライカの開店や、職場サークル連絡会の発足などがあった。）、D51合唱団、仙音アコール、仙台合唱団の3団体の呼びかけでもって、79年6月に協議会を発足させた。

規約上は日うた全国協規約を踏襲し、規約の「性格・目的」、「活動」の部分は全国協議会規約と同じ（全国を宮城県と直したもの）であり、様々な合唱団・サークルを



日本のうたごえ運動へと組織しようとする運動体としての性格が強くあった。日本のうたごえ全国協議会も全国組織の県支部としての本役割を強く求めており、連絡協議体組織と運動組織との性格をめぐって問題を複雑にしていた。宮城県の場合、地域・職場のうたごえ中心合唱団以外のサークルは、「いままでどおりの連帯関係で十分である」として加盟を見合わせていたし、すでに県単位の協議会を結成していた学生のサークルも、「メリットがない」として加盟してこなかった。呼びかけに加わった仙音アコールも加盟しなかった。結局仙台合唱団、D51、郵便きぼこの3団体で発足し（会長佐久間）、その後電通モーニングコールが加盟したが、全ては全国協議会に加盟しており、職場サークルの3団体は全国の職場のうたごえ協議会にも加盟していた。

そうした意味からも、再建された宮城のうたごえ協議会には、うたごえ運動の組織化を目指す「指導性」が求められていたが、仙台合唱団を除いては人数的にも大きな組織ではなく、3サークルから出されている委員は、事務局長となった遠藤晃（34期生・郵便）を除いてすべて仙台合唱団員であった。よって、実際の活動は、宮城のうたごえ協議会独自の活動よりも、その時々に応じて「サークル代表者会議」や行事の実行委員会を結成するということになり、再建準備会の活動と変わることはなかった。協議会1年を経過した取り組みの反省として、「いま求められているのは、運動体よりも連帯組織である」と総括し、日本のうたごえ全国協議会未加盟サークルの参加の条件を探り、全国協議会に縛られない県独自の組織の意義を全面に押し出していくことになる。その結果、仙音アコール、どろんこ（保母）などが加入していった。そこには、当時において仙音アコールを初めとする未加盟サークルの活動が、県のうたごえ運動を進めていく上で無視できないほどの力を発揮していたということもできよう。

この宮うた協が中心となって、電通（市民会館750名＝80.10）、保母（市民会館1000名＝81.9）、国鉄（市民会館600名＝82.10）と3年連続で職場のうたごえ全国祭典を仙台で引き受けることとなった。結成されたばかりの宮うた協の内部で十分な体制が整っていたとはいえず、かなり無理をした取り組みともなったことは否めない。80年と81年は直後に大音楽会形式の宮うた祭典を行うというものであったが、それぞれ400名程度しか組織できず、結果として職場サークルの組織は進んだものの、宮うた祭典をはじめとする宮城の運動や仙台合唱団を中心とする活動家には大きな課題を残してしまった。82年以降は大音楽会形式の祭典は開くことができなくなってしまった。

その間仙台合唱団は、福島合唱団、郡山合唱団、大槌などへの援助を通して、東北のうたごえに対する足がかりを作り出してきた。77年の郵便のうたごえ仙台祭典（77.9）での東北オルグと、ライモンわらび座公演（77.6）での歓迎実行委員会結成（盛岡）をきっかけに、久々の東北全体の集まりがもたれ、そこから、東北の連帯をつくり出す一環として交流会が企画された。第1回東北のうたごえ交流会（78.5）は盛岡市で開催され、宮城からは6サークル18名が参加した。（全体で155名参加）「ビバ・ヤング東北センセーション」と題し喫茶店を借り切ったの大うたう会と合同レッスンがメインであったが、第2回目以降は組織的な体制が整えられ、大交流を基本に、理論学習、合唱団レッスン、指揮法・創作法などの実技学習、合同発表の練習、うたごえ協議会の

実践的交流など多彩なプログラムが整備されていった。80年代を通して岩手－秋田－福島－山形－青森－宮城という順に各県持ち回りで6月頃に開催され、約200～300名ほどが集い、93年まで続いた。日うたからは講師として、杉浦敏郎、浜島康弘、山本忠生、井上頼豊らが参加した。この運動は連帯活動、学習活動として全国的にも特徴を持ったものであったが、各地の中心（センター）合唱団は仙台合唱団を除くと小さいとはいえ、各県にうたごえ協議会が存在していたことが大きな力となっていた。80年からは日うた常任委員ともなった高平らが音頭をとって東北うたごえ教育者懇談会が開催され、指揮者をはじめとするリーダー層の教育活動も始まった。86年1月には仙台合唱団が事務局となり東北のうたごえの代表者会議を正式に「東北のうたごえ連絡会議」としていった。

## 2. 創立30周年事業と指揮者の交代

1982.3～1985.4      41期生～43期生

70年代の勢いのもと、80年代初頭の仙台合唱団は、創立30周年に当たっての記念事業を計画し、着実に運動を展開してきた。音楽センターに新しいピアノを入れ、声楽レッスン、郷土レッスンなども順調に進められていた。80年からは団長をカルビー、書記長をパーマンとし、「70年代型活動」で教育された若手が初めて団長となった。また、元盛岡合唱団団長であった飯沢智美（バン・電通、80.4）や山形合唱団の斉藤俊宏（シュン、81.2）など、東北のうたごえ活動家も何人か仙台に転入し、研究生を経ず直接入団することによって、新たな力となっていた。職場のうたごえ全国祭典との関連では、電通、保母、国鉄などのサークルが再建ないしは強化され、研究生が着実に送り込まれるなど組織化が進んだ。

また、80年からは市内の文化団体が集まって、「平和と文化の集い」を毎年行ってきた。これは、自衛隊参加をはじめ商業化が進んでしまった仙台七夕祭りを市民のものに取り戻す運動の一環として、七夕まつり期間中勾当台公園でとりくまれたものである。第1回、第2回の実行委員長は高平であり、合唱ばかりでなく、器楽、民謡、絵画、写真、演劇、映画などの団体を集め、市内の平和運動、文化運動をリードしていった。そのほかには、私学の集いでの演奏協力や、仙台小劇場公演の合唱協力、松山事件斉藤さんを守る会などと新たな協力関係も打ち立てていった。81年2月にはうたごえ運動が育てた若手シンガーソングライターきたがわてつとともに、30周年を目指す早春コンサートで大ホール（電力ホール、917名）で成功させた。取り組みからいって演奏会規模のものであり、きたがわてつとともに30名以上の団員が、福祉施設を中心に市内23カ所のオルグ活動を行った。

しかし、30周年記念事業計画途中の82年3月に、指揮者・創造委員長であった高平の突然の休団（一身上の都合）という事態が起こった。30周年記念事業委員会は81年9月に発足し、82年中にレコード歌集制作や古川での地方コンサート、83年には記念音楽会を開催するなどの計画を立てていた。直前の1月にはカルビーをキャップ、パー

マンをサブキャップにする事業計画を作り、全団に訴えを起こし、常任委員会をはじめ各委員会が動き出したばかりでの出来事であり、新たな体制の構築が団の大きな課題とならざるをえなくなった。

直後の団総会で創造委員長にニキを選び、勝代とともに副団長となったほか、チョーが書記長、福原やす子（フク・36期）と桜井祐子（マンボ・37期）が書記次長になり、小玉淑子（ドン・38期）を教育部長にするなどの体制を変え、古川コンサートなどの短期方針を討議した。古川コンサートは、81年3月に結成されたうたごえサークル「つくしんぼ」やママさんコーラス（後に「ともしび」となる＝82.8）など古川市をはじめとする県北のサークルとともに、コンサート合唱団90名を組織して開催された。その後7月に、仙台合唱団は流会を繰り返した後の選挙総会で29名の委員会体制を打ち出した。三役では書記次長にマンボと交代で大沢哲（ビット・37期・電通）が入ったほか、加藤宏（ヒロ・34期・国鉄）、武田政彦（チャップ・37期・電通）、佐藤宏（ガッタ・39期・しおさい）などが新しい常任委員となった。83年には、ドンが産休のためニキ、カルビーの複数でレッスン指導をする形となり、9月臨時総会ではカルビーが職場の都合で団長を退任し、バンを団長とする体制ができあがった。そこでは、計画から1年遅れとなった記念音楽会に対して、バンを委員長、企画ニキ、事務局パーマンという体制がとられ、84年1月に30周年記念の第10回演奏会が開催された。30年といっても初めて演奏会に参加する団員が半分以上であり、OBの参加も少なく、30年の歴史が十分反映されたものとはならなかったが、日うたから山本忠生、守屋博之、林学らの援助もあり、青春メドレー、郷土、合唱構成松山事件、組曲「永遠のみどり」等の企画が取り組まれた。

84年4月の総会では、30周年事業を含む3カ年計画の総括が討議された。この間途中で書記長、指揮者、団長が交代するという事態もあって、計画が十分に達成されたとはいえなかったが、100回以上の演奏、300回以上のうたう会、120名以上の研究生教育を通して、方針に乗っ取った実践が展開されたことを確認した。特に、外にうって出る「1万人うたう会運動」では、うたう会参加者は1万人を突破し、83年5月総会時で目標は達成していた。しかし、運動の普及組織ということになると、10回演奏会の取り組みが重点課題となった83年9月臨時総会以降、様々な大衆行動や集会に出かけサークル建設やうたう会を展開するといった運動の目的意識的な追求は鈍く、「演奏会中心」の団活動になってしまったことが問題にされた。カマラードイも低調が打開できず、当初約20あったサークルを50に増やそうという計画は逆に10程度に落ち込み、3つの全国産別祭典で作られたうたう会も育ってこなかった。バンが団長になってからの宮うた協役員兼務は、その後うまくいっているとはいえ、宮うた協の体制は曖昧となり、むしろ弱体化していったといえる。この間できた新しいサークルは、塩釜海の子（84.10）、医療セデス（84.10）、つくし座（83.7）、南光台うたう会（85.1）、母さんの樹（85.3）、名取おんちーズ（84.8）などがあった。

合唱の力量に関しては、年間120回以上のレッスン、年間30回以上の声楽教室を軸に、演奏会等を成功させてきた。教育指導者としても菅原伸子（サスケ・34期）、横川

智子（ポッキー・35期）＝いずれも宮城教育大学出身らが育ち、「郷土」の取り組みの復活や、創作でも千葉富士男（チョビン・39期・つくし座）らが力を発揮してきていた。日うたから山本忠生らがレッスン指導に訪れるようになり、83年までは日うた合唱発表会でも2位、3位を占め、全国のベスト7～8のレベルに達していた。しかし、84年に選外となり、85年に3位入賞した以降日本のうたごえ祭典で入賞はしていない。

高平は83年10月に復団した。その後教育部の委員を務めたりしたが、団の演奏、指揮というよりも、むしろ団外での活動が中心となっていた。30周年事業の一環としての古川コンサート（82.6、84.6）や10回演奏会では音響、編曲で力を発揮したものの、団内の教育や創造活動の中心はニキ、カルビーらに移っていった。84年には宮うた担当の委員、85年には規約改正後の方針により、指揮者グループを育成することが盛り込まれたため副指揮者となるが、（正指揮者はニキ）仙台合唱団の創造内容には積極的に加わらなくなってきた。職場の状況では、高平は80年代の労働戦線再編の動きの中で右傾化に反対する闘いに参加していた。1974年に作られた統一戦線促進労働組合懇談会（統一労組懇）は、83年に階級的ナショナルセンター確立を目指し産業別あり方懇連絡会を結成していたが、この連絡会が中心となって宮城県でも「連帯と交流のつどい」がもたれ、宮うた協に結集する職場サークルを中心に「地底のうた合唱団」が結成され高平が指導に当たった。（84.3）また、出身労働組合である電通長岡事件の裁判闘争勝利を目指した組曲「母さんの樹」の合唱指揮（「合唱と対談の集い」で演奏＝85.2）等に力を発揮していった。（その後「連合」に参加していった全電通労働組合に対抗して通信労組を作り、宮城支部副委員長を務めた。）さらに、なくせNUKEコンサート（85.7）や全国電通労働者合唱団「ザ・ナッツ」の指揮者などのほか、合唱団美樹（浜松市）、岡山合唱団、鳩の森愛の詩合唱団（横浜市）、神戸青年合唱団など他団体の委託創作や指導の活動が中心となっていた。県内では、利府の女性コーラス「コールマリード」（78年より）や医療のうたごえセデス（84年より）の指揮者をつとめた。86年6月総会で再び一身上の都合で休団し、作曲活動が中心となり（86年には第2回三木露風賞受賞）、その後復団する事はなかった。

村上 仁（カルビー） 35期生

- 77. 6 35期生として入団（東北工業大学うたごえサークル三つ葉会員）
- 78. 8 団総会で常任委員
- 78. 9 臨時団総会で書記次長
- 79. 1 カルデパーチャで活躍
- 79. 7 団総会で常任委員
- 80. 6 団総会で団長になる（以降83年9月まで）
- 81. 2 第2回東北教育者講習会参加
- 82. 1 30周年記念事業委員会キャップとなる
- 83. 8 団委員会で団長退任受理

- 84. 3 東北学うた協講習会で声楽指導
- 84. 4 団総会で委員（研究生教育部）
- 84.10 医療のうたごえ「セデス」結成
- 84.10 星空コンサートin泉で指揮
- 85. 4 団総会で副指揮者
- 85. 7 世界平和友好祭（モスクワ）にうたごえ代表団で派遣される
- 85. 9 宮うたバリバリコンサートにソロで出場
- 85.10 松山町音楽祭で指揮
- 85.11 日うた祭典で指揮
- 86. 2 第11回演奏会で指揮
- 86.11 宮うたみんなでつくる音楽会にカルビー＆タッキーで参加
- 87. 3 総会で運営委員、副指揮者
- 87. 7 わが街コンサートで指揮
- 87. 8 団員指揮研究会で講師
- 87.10 みんなでつくる音楽会にカルビー＆タッキーで参加
- 88. 2 医療のうたごえ全国協議会再建に活躍
- 90. 8 団総会で運営委員外の副指揮者となる

我妻 久司（パーマン） 35期生

- 77. 6 35期生として入団（郵便きぼこ団員）
- 77.9 第11回郵便のうたごえ祭典実行委員
- 79. 1 カルデパーチョで活躍
- 79. 7 総会で書記次長
- 80. 6 総会で書記長
- 81. 1 仕事の都合で休団
- 82. 1 30周年事業委員会サブキャップ
- 82. 4 総会で常任委員（組織担当）
- 83. 5 総会で常任委員（機関紙担当）
- 83. 9 団委員会で記念音楽会事務局責任者
- 84. 4 総会で書記次長（組織財政担当）
- 84. 5 休団

飯沢 智美（バン）

- 70 盛岡合唱団に入団（電通）
- 78. 7 盛岡合唱団団長時代世界平和友好祭（キューバ）にうたごえ代表団で派遣される

- 80. 4 仙台に転勤となり入団 電通モーニングコール結成
- 80. 5 宮うた協総会でモーニングコール代表で委員
- 80. 6 総会で常任委員（うたう会担当）
- 80. 10 電通のうたごえ仙台祭典実行委員
- 81. 1 休団となったパーマンに変わって書記長代理
- 81. 3 総会で常任委員（普及部）
- 81. 5 宮うた協総会で副会長
- 82. 4 総会で宮うた担当の委員
- 82. 5 仙台合唱団古川コンサート事務局長
- 83. 9 臨時総会でカルビーの後を受け団長になる（以降89年3月まで）
- 83. 9 30周年記念音楽会委員長
- 84. 9 母さんの樹合唱団を組織
- 85. 4 佐久間と連名で県内サークル合唱団代表者会議の呼びかけ
- 85. 4 運営委員会で演奏教育部長
- 86. 1 東北のうたごえ代表者会議をリードし正式に「東北のうたごえ連絡会議」を発足させる
- 86. 2 佐久間と連名で県内サークル合唱団代表者会議の呼びかけ
- 86. 6 バラライカ新店舗をつくる会代表世話人
- 86. 7 地主アコーディオン教室参加
- 86. 11 移転問題で全団員に手紙
- 87. 7 団友会世話人会呼びかけ人
- 88. 5 アコーディオンの夕べ実行副委員長
- 89. 4 山形に転勤となり団長、演奏教育部長を辞める
- 89. 9 退団
- 90. 1 演奏会問題の全団集会に参加
- 90. 2 日うた総会で常任委員となる
- 90. 9 東北音楽センター設立呼びかけ人

### 3. 事務所移転と研究生組織の減少

1985.4～1990.8 44期生～49期生

指揮者の交代で迎えた80年代後半は、常任指揮者を団長とする強力な指導体制から脱却し、多くの活動家を育てる中で団を運営していくという課題が試された時期であった。しかし、民主的な運営と団経営をめぐるのは、逆に団内の問題が露呈していった。これは70年代からも指摘されていたことであったが、指揮者、指導者の問題ばかりでなく、レッスン結集の悪さや、団費の滞納、会議の不成立など、サークル組織の根本的な課題であり、うたごえ運動の中心合唱団としての仙台合唱団が創立以来抱え

ている一貫した課題でもあった。

90年代に向けての方針を問題にした85年4月総会では、78年8月総会で改正された綱領・規約を見直し、全面改正を行った。綱領については議論があったが、「労働者階級の立場に立つ」は変えずに規約の改正によって団活動を見直すという結果になった。まず、①現行綱領が1950年代後半の情勢を反映した内容となっているため、目的と性格をはっきりさせた。「大衆的・民主的音楽集団であること」、「うたごえ運動の中心合唱団であること」、「幅広い連帯と大きな目標を持つこと」が明記された。②団員の資格では、義務履行が自主性に任せきりになっていることから、レッスン参加と団費納入を重視することによって、団員の資格を担保するものとして除籍規定を設けた。③団運営の基本に関しては、常任委員会の請負体制を脱却するために、運営委員会を創造面を含む中心機関とする団運営体制を定めた。創造委員会は機関としては廃止された。④指揮者を総会で確認すること、正指揮者、副指揮者のほかグループとして育成することが目指された。⑤その他、加盟団体の再確認、団友制度を設けることなどの改革を行った。新しい三役として副委員長に大沢哲（ビット・37期・電通）、書記長に狩野さとみ（トコ・40期）、書記次長にチャップを選出し、新常任委員には二宮珠江（キンジロー・42期）、黒田あきさ（タッキー・42期）、渡部祥子（えんじ・43期）が入った。また、ニキが正指揮者となり、高平、カルビーは副指揮者に選ばれた。

新体制のもとで、松山町コンサート（85.10）、カルビーのモスクワ平和友好祭派遣（85.8）、国鉄分割民営化に反対するミュージカル「希望」公演（86.4）などの取り組みを行っていった。しかし一方では、月1回行うとされた運営委員会は不成立が続き、団財政の悪化に伴う声楽教室の削減や、うたごえ新聞の滞納・センター維持費の問題に端を発した佐久間の休団などもあり、運営体制は順調には進まなかった。宮うた協も会議が開かれず、佐久間とバンが連名でアピールを出すことによって県内サークル代表者会議を開き、2年ぶりで県内16団体が集まったが（85.5）、各団体とも停滞や休会の状況が続いていた。仙台合唱団自身も11回演奏会を開催したが（電力ホール、500名＝86.2）、組織的には大きな赤字を出してしまった。これらの状況は、国鉄民営化に代表されるような80年代後半の「第2の反動期」をめぐる職場の状況と無関係ではなかったが、同時に、大量のうたごえ活動家を排出していた学生のうたごえの弱体化（おたまじゃくし、やまびこの解散、85.4）や、アコールの活動停止（85.3）なども影響していた。地主が復団しアコーディオン教室を再開（85.9）したりするなど、45期研究生までは何とか20名台を維持していたが、46期からは研究生が1桁しか集まらないといった状態で、団の勢力は減少していった。

こうした状況の中で、利休ビルが老朽化し家主から移転通知を受ける。滞納60万円などこれまでの団経営問題が噴出したため、緊急に対策会議を持ち、87年3月総会で一番町の宮帆ビルに移転することを決定した。面積が10坪と半分以下になったにもかかわらず家賃が月74500円、防音工事等で100万円ほどが必要なため、宮うた協をはじめとした他団体訴えて募金活動を行ったほか、団費を月2000円に値上げすることなどを決めて4月に引っ越しを行った。しかし、新事務所は雑居ビルの中にあるため入

居後クレームが入り、平日の夜間は歌を歌うことが週1日に規制されるなどレッスン場としては不十分な場所であり、創造問題では大きな弱点を持っていた。新事務所オープン祝う会（87.9）では団友会が正式に発足（世話人会長野田、副会長宮田、事務局長岡村朋子、会計相沢功）したが、団費滞納90万円、うたごえ新聞滞納27万円など、懸案の課題は解決されていなかった。87年6月29日号のうたごえ新聞では、団費滞納のほか、中央への滞納65万円、個人借入れ447万円の計512万円の負債を持っていることや、団員61名中レッスン結集が10名以下であることの記事が載り、茨城県南うた協のさわだちゅうより「合唱団の体をなしていない」との厳しい手紙をもらっている。87年には1年間で半数近くが休団、退団するなど、団の勢力は激減した。

88年3月総会では、書記次長に田沼義昭（エグ・45期・南光台うたう会）とキンジローを新たに選び、常任委員は三役のバン、ニキ、トコを加えた5名のみの体制となったほか、地主が副指揮者として選ばれた。この年は2月に宮うた協が3年ぶりに再建総会を行い、新たに、仙台合唱団、電通モーニングコール、母さんの樹、セデス、D51の5団体と名取おんちーずの下山克彦（ET・45期）の個人加盟によって再発足となった。（その後3月に古川つくしんぼが加盟）バンと勝代が副会長、事務局長はチョーであったが、佐久間によってセデスの三橋吉則（スケ・30期）が会長となり、電通の川村滋道、セデスの藪田隆司、つくしんぼの佐藤孝、その後個人で加盟した石巻フォークキャラバンの飯田利通など、役員には仙台合唱団団員以外の活動家が加わった。再結成された宮うた協を中心として、日本母親大会（盛岡市＝88.7）での東北合同「おおブナの森よ」演奏（合唱隊306名）や電通のうたごえ仙台祭典（88.10）などの取り組みを行ったほか、宮うた35周年記念として「うたごえとアコーディオンの夕べ」（実行委員長宮田、記念合唱団55名＝88.10）を開催していった。

しかし、89年には、バン、エグが転出となり、地主が休団、ポッキーも就職し登米町へ行くことになったため、仙台合唱団内部でのリーダー層はさらに減少していった。新たに団長トコ、副団長に小野寺智雄（歩・45期）と勝代、書記長にシュン、書記次長にキンジローと鈴木栄一（タワシ・47期）の体制をとっていったが、合唱団組織の減少はくい止められなかった。これらの動きの中で、日うたからは91年日本のうたごえ祭典仙台開催の提起があったが、宮城の活動家の中で十分に討議はできず、見送りとなった。第12回演奏会は延期された後に山形合唱団、郡山合唱団の応援を受け90年7月に開催されたが、組織は150名にとどまった。直後の臨時総会では、結婚のために転出となったトコ、キンジローの後を受け、歩を団長に選び、チョーが副団長に復帰した。副指揮者のカルビーは運営委員外になった。

狩野さとみ（トコ） 40期生

81. 8 40期生として入団

83. 5 総会で常任委員（組織担当）

83. 8 原水禁世界大会（長崎）に派遣



- 84. 3 反トマホーク集会（横須賀）に派遣
- 84. 4 総会で常任委員（普及組織部長）
- 85. 4 総会で書記長（組織財政部長）以降89年まで
- 85. 9 宮うたバリバリコンサート講評委員
- 86. 7 地主アコーディオン教室参加
- 89. 3 総会で団長 90年8月まで
- 90. 8 結婚転出のため退団

小野寺智雄（歩） 45期生

- 86. 5 45期生として入団（東北大学生）
- 89. 3 総会で副委員長（普及組織部長）
- 90. 6 全国指揮者教育者講習会参加
- 90. 8 総会で団長 以降97年まで

## 第5節 地域うたごえ運動の40年のあゆみから

### 1. 東北音楽センターの創設とそれ以降の活動

90年代以降のことは、仙台合唱団の現状ということになるが、簡単に概説しておこう。この間の新たな動きとしては、定年前に退職を決めた晶夫がうたごえの専従を決意したことによって、東北音楽センターの設立が現実問題として浮上してきたことがある。山形に転出したバンが90年から日本のうたごえ全国協議会の新常任委員となり、東北からは勝代とともに2名の体制となったこともあり、山形、宮城を中心にセンター問題が検討されてきた。日うたからは山本忠生を交えて基本構想を検討したが、晶夫を職員とし企業組合を設立する方針が固められていった。90年1月の東北のうたごえ代表者会議で経過報告と晶夫の決意表明がなされたが、各県の基本構想が一致するまではかなりの時間を要し、3月に仙台で開かれた東北のうたごえセミナー（「指揮者・教育者懇談会」を名称変更）では、晶夫、オカジの両名を専従にする案も東北の各団体に提示された。直後の仙台合唱団総会では、仙台合唱団、宮うた協、東北うた協共同の専従を実現するという方針を決め、準備に取りかかった。結果としては、仙台合唱団、宮うた協、音楽家ユニオン仙台支部の共同専従の形で仙台合唱団事務所に入るといことで、晶夫1人の専従を実現していった。90年8月31日に晶夫は退職し、9月の東北のうたごえ秋のセミナー（仙台）で設立趣意書が確認された。

当初の目標では、企業組合または法人化することにあつたが、東北各県全体の議論が進まず、各県うたごえ協議会や合唱団の方針にセンター建設の運動を盛り込むことができなかったため、設立呼びかけ人個人参加による任意団体としてスタートせざるを得なかった。趣意書には目的と活動として、東北における民主的な音楽・文化運動の発展のために、運動の前進に役立つ事業活動（企画・制作・出版・販売・教育など）を行うことが示され、東北のうたごえ各県代表、個人の参加を得た運営委員会（理事会）の協議によって運営されることとしてある。呼びかけ人には加藤雅友（弁護士）、藤村三郎、南部敏郎（バラライカ代表）宮田猪一郎、井上勝代、斉藤範雄（全国詩人会議）、三橋吉則（宮城のうたごえ協議会会長）、今野洋子（岩手のうたごえ協議会会長）、飯沢智美（山形センター合唱団副団長）、紺野茂美（福島のうたごえ協議会会長）が名を連ねた。責任母体は当面は運営委員会（理事会）ということになったが、個人の責任ではなく各県の協議会や合唱団が責任を持って派遣するというまでにはいたらず、センター運営に当たっての大きな課題となった。予算的には支出予定予算に対して収入予定予算が年間約60万円ほど足りず、当面出資金でまかなうといった苦しい体制からスタートしていった。それでも多くの基金を募って90年10月に設立総会を行った。

以降、日常的には仙台合唱団事務所に詰めかけている専従者のもと、新たな事業や運動の企画がくまれていった。特に事業部門では、それまでの赤字・滞納を一掃し、91年日うた総会では仙台合唱団がゴールデンディスク賞激励賞を受賞している。この年に東北音楽センターは日うた全国協に加盟した。

仙台合唱団では日常的に活動が困難となっていた団員が増える中で、センターは、教室・講座、コンサート・ステージ企画、制作・出版、販売・斡旋などの事業を行った。晶夫を中心として、その後東北造船ミュージカル（92.12、93.11）、日本母親大会（93年山形、96年仙台）、教育のうたごえ祭典（93.8）、仙台合唱団同窓会（93.6）、のほか、「地の道・天の道」「セデス」「高平作品」等のCDを制作・普及の活動や、音楽家ユニオンとの共同事業を展開した。

しかし、一方の仙台合唱団は、90年代を通してセンター合唱団としての役割を果たしきれず、研究生も49期でストップしている。団員はイベントには結集してくるも、新しい団員は増えず、D51、セデス、母さんの樹、あめんぼ、といったサークルと同規模のものとなっている。それらの団体は仙台合唱団団員が中心となっており、仙台合唱団のレッスンには結集していないが各サークルでがんばっているわけであるから、従来の仙台合唱団の機能が4つの団体に分割された様相になっている。96年には東北で初の日本のうたごえ祭典（盛岡）の取り組みの中で、人数的には仙台合唱団よりも大きくなった「高平CD合唱団」が「合唱団ふきのとう」として発展した一方で、仙台合唱団は「宮うた合唱団（仮称）」として再発足しようとする動きも現れた。結果としては、名称は捨てずに過去の仙台合唱団を1回断ち切るというなかで、勝代を団長とした「新生」仙台合唱団が再出発し、97年11月に「第1回」演奏会を開催した。

## 2. 地域うたごえ運動の前進と停滞をめぐって

40年以上にわたる仙台合唱団のあゆみは、1998年1月の時点において、一方で日本のうたごえ50周年記念大阪祭典（黒田清実行委員長）が大阪ドームに26000人を集め大成功に終わる中で、過去の歴史を一度断ち切った「新生」仙台合唱団が再発足するという記述で終わっている。もっとも、断ち切ったのは財政赤字や、負債ということであって、運動の理念までも否定していったわけではないが、日本のうたごえ運動自体が全国同一步調で一律に行われているわけではないことを端的に示している。

大衆運動としてのうたごえ運動は、常に新しい（特に若い）メンバーを獲得し、運動の担い手へと育て上げながら進められているわけで、社会の新しい動きに対して経験主義的にだけ対応しているわけにはいかないものである。運動の初期から一進一退はあったし、それは仙台や宮城県に限らずほかの地域も同じことがいえるであろう。その意味で、現時点の仙台合唱団が「停滞」しているということがいわれたとしても、それは前進に向かうための停滞か、崩壊に向かっての停滞かが問われるのであって、運動を担う団員に求められていたのは、いつの時点においても「前進するために必要なこと」であった。同様に、歴史をまとめる際において必要なことは、過去への回顧ではなくて、過去の教訓を現在に生かすこと＝同じ失敗を繰り返さないことである。それは、歴史を学ぶことが子どもたちにとって「基礎学力」に位置づけられるのは、古い時代を知ることよりも、過去の歴史での誤りや解決しなければならない課題を知ることによって、「今自分はどうするか」を学ぶことに重点があるのと同じ意味合

いである。

しかし、運動を現実に担っているメンバーの手によって書かれる歴史と、より客観的な立場から書かれた歴史は、歴史研究に同じ意義を見いだしているとしても違う視角が出るのは当然のことである。上記の歴史の見方に関していえば、日本の場合は「戦後世代の戦争責任」（加藤周一）などという問題がかなりのウェイトを占める事項として提示されているが、40年活動している団員と入ったばかりの若者とが一緒に歌うという活動において、意義や目的の正当性だけではなく特別の方法や対応がとられるべきであることは疑いを待たない。「うたごえは平和の力」「うたは闘いとともに」「一人が一人をさそう運動」といううたごえ運動の基本理念、あるいは「平和で健康的なうたごえを普及する」といった基本目標は一貫して変わらなかったとしても、その時々において具体的な方法は同じというわけではない。普及・組織をする側も最初から40年やっているベテランではなく、日本の文化運動の歴史上初めての実践をするということであったので、総括すべき事柄はたくさん存在すると思われるのである。

本研究は運動の普及・組織化の側面から、地域の大衆運動を問題にしたわけであるから、特に運動の「前進と停滞」をめぐる評価基準も特殊なものとならざるを得ないし、それは調査研究の宿命でもある。この場合は、量的な基準（団員数、研究生の組織数、祭典や演奏会の組織数など）、質的な基準（演奏力量、団内民主主義など）のほかに、集団と地域（地域のサークルばかりではなく職場や学園も入る）に関する教育の水準を問題にしたということである。普及・組織化に活動の目的を持つ団員（リーダー層）が、まだ自己形成の途上にある若い団員（研究生）に教育的な働きかけをする過程での問題である。自己形成（自己変革）と他者への普及・組織（地域変革・人間変革）は、人間が発達していく上での段階の違いであって、これは個人の場合だけではなくて集団の場合にも当てはまる。普及・組織に対して教育力を発揮する側も成長しながら（教育されながら）活動を展開させていく過程、さらにはそれらがまとまった集団自体も同様な運動であったというこの地域うたごえ運動の歴史をみると、大衆運動の普及・組織をめぐる状況の中にそれらは典型的に現出するからである。

1節から5節まで分けて書かれた仙台合唱団のあゆみは、節ごとに画期を伴った団自体の性格の変化を示している。簡単にまとめると、第1期はプロレタリア青年運動の「文工隊」から、うたごえ運動の中心合唱団へと自らを変革する過程の時期である。成立時期も曖昧な合唱の集団が、2年以上の団内討議を重ねて綱領と規約を確定してくるまでであり、基本的性格においては、この綱領規約の成立をもって画期とした。

第2期は、中心合唱団の内実が問われた時期であったが、組織リーダーを専従として迎え、宮城県をはじめ東北地方のセンターとして活動した時期である。宮うた協や東北うた協の組織を外側にどんどん作りだしていったが、それらを拡大していくためには、組織リーダーとしての「専従型」活動のみでは限界を持つことが明確となり、専従体制の崩壊を画期としてとらえたのである。

第3期は、全国の指導者関鑑子の死去ということもあり、日本のうたごえ運動自体も大きく転換していった時期である。それは、「70年代型」といわれたような、音楽運動

としてのうたごえ運動へと性格を変えていくことであった。団が大きくなり力量を高めることによって市民権を拡大していったが、そのためには強力な音楽リーダーを必要とすることになり、創造性と組織性をめぐる運動に対する評価が団内で分かれていった。いわば、創造と普及をめぐる団内民主主義が重要な課題として浮かび上がってきたことが画期となった。

第4期は、以上の課題がきちんと整理されないままに、「70年代型」で教育された若いリーダー層に引き継がれていった時期であるといえる。新しいリーダーはもはや専従を指向せず、一般の市民合唱団と遜色のない形態と力量を持つ合唱団が、うたごえの中心合唱団の役割を果たすという課題を実践しようとしていった。問題は常任指揮者の交代という出来事の中で、これらの課題が一人一人の団員に課題化されていたかということである。結果として、80年代を通じて、様々な努力があったものの仙台合唱団は経営的には失敗したという結論になる。90年代からの第5期は、それらの矛盾を団外に専従をおくことによって切り開こうとしたということになるであろう。

4期以降のことは、団内できちんと総括がされていないように思えるので、客観的な指摘のみにとどめるが、この点に関しては、井上頼豊が70年代からのうたごえ運動の新たな展開を整理しているので参考にしてみたい。まず、70年代までの運動の3つの高揚期から見て（第1期は1954年の「原爆許すまじ日本のうたごえ祭典」の時期、第2期は1960年代前半の安保・三池闘争の時期、第3期は70年代初頭の歌劇「沖縄」上演活動の時期）、運動が大きく発展するための基盤・条件を、次の3点にわたって整理している。それは、「①社会的運動が大きく高揚したとき、②うたごえがその時点と情勢にふさわしい事実を反映し、個性豊かで迫力を持った演奏内容（簡単にいえば、演奏スタイルとそれに見合う声）を獲得したとき、③その演奏内容を作る上で専門家の適切な援助・協力・指導があったとき」（「うたごえの発展と飛躍への期待」『前衛』1996年1月号）である。これらを歴史的な教訓とした上で、70、80年代の新たな展開では、自分たちが歌で主張するということから、音楽をだれに届けるかの点で大きな変化を見せ、国民の様々な要求に根ざした多様な活動を展開し、反核・平和などを共通の課題とし共に運動を進めていったこと、同時に専門家たちとも新たな協力関係を打ち立てていったことを指摘する。とりわけ、広範な市民と歌うことを可能にした優れた作品を多くの協力や努力で作上げ、「作品・演奏と結合した拡大運動の意識的な取り組み」を行ってきたことである。それは80年代にいたって、「永遠のみどり」や「ぞうれっしゃがやってきた」の様な「〇〇を歌う合唱団」に代表される、「うたで広げ、うたで組織する」という運動の方向が方針として掲げられていったことを強調している。仙台合唱団も基本的にはこの方向で運動を展開していた。ただし、財政赤字に代表されるように、経営的には転換がはかられざるを得なかったのである。

以上のような画期で分けた仙台合唱団の団としての展開は、それぞれが1期＝50年代、2期＝60年代、3期＝70年代、4期＝80年代、5期＝90年代という時期と符合している。さらにいえば、団長（委員長）を中心としてみると1期は谷、2期は藤村、3期は高平、4期はバンの時代ということになるかもしれない。団の歴史が「人物史」と

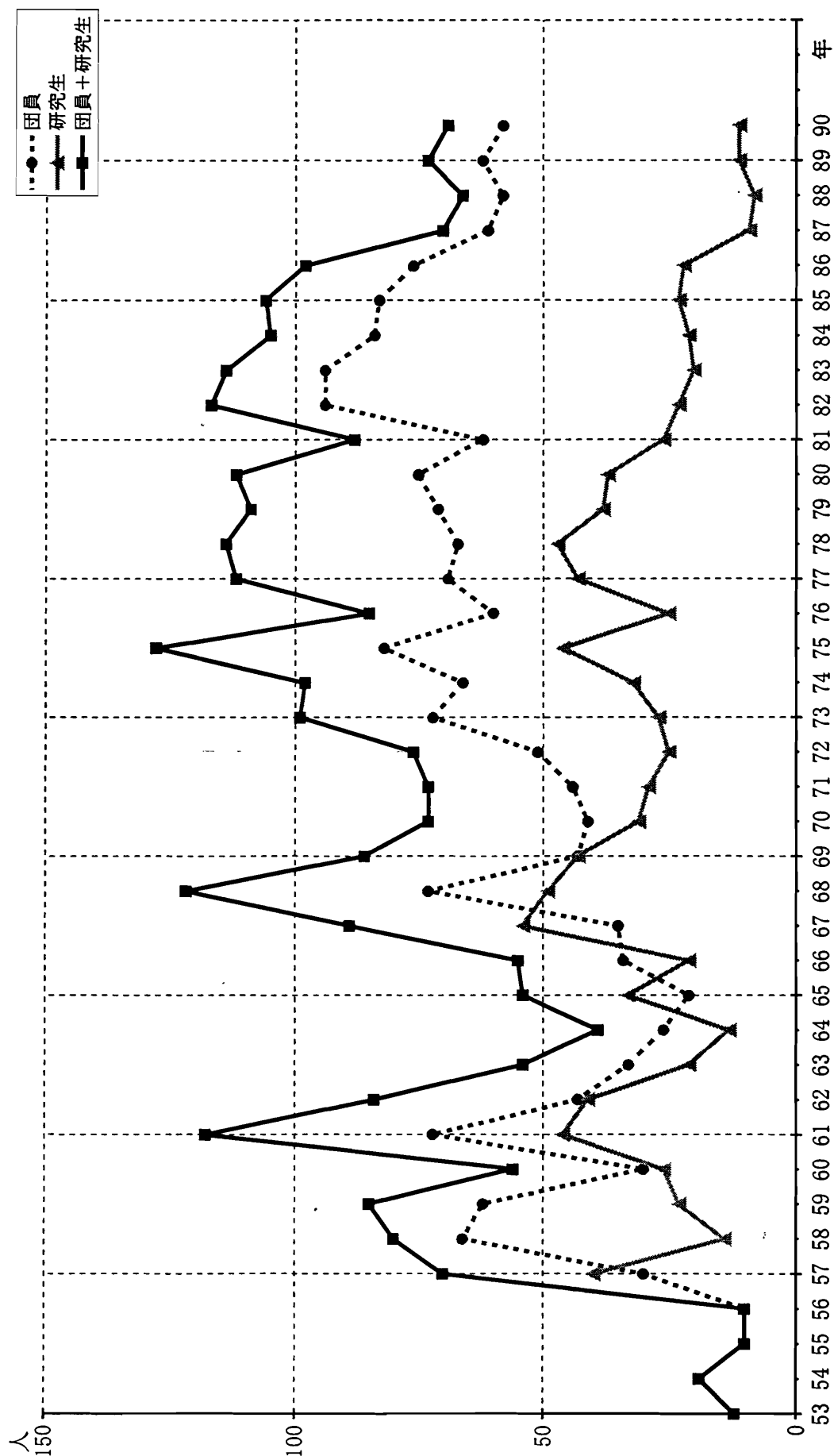
してみられてしまう根拠もここにあるが、それぞれの時期はそれに見合った力量を持ったリーダーを必要としていたことは指摘しておこう。(資料：リーダー層の変化 参照) このリーダーの交代の時期が、概ね団活動の画期と連動しており、新しいものに展開していくための矛盾が集約された時期ということになるだろう。年表的にきちんと線が引かれるわけではないが、1期から2期、言い換えれば谷から藤村への交代に関して、「巾広論」や「中心合唱団の任務」に関する団内統一の課題＝それは教育の課題があった。2期から3期へに関しては、「うたごえの現代化、大衆化」や「音楽運動としてのうたごえ運動」に関しての議論である。3期から4期に関しては「創造性と普及」に関する議論ということになるだろうか。それぞれが前の時期に新しい形態に移行するための準備の動きが始まり、指導者の交代を含んで何年かをかけて性格を変化させてきたという経緯があった。つまり、今まで通りの経験的方式ではうまく行かなくなった時期というのが「停滞」の時期であり、新しい方式を見いだしてその体制が全体的に確立されていった時期が「前進」への時期であるといえる。これらの事態は、団と団以外(地域や社会の状況)での普及・組織をめぐる関係の中で現れるものであって、団内事情(団運営の民主主義とか個人の志向、性向)によってのみ作り出されるものではない。まさにサークルではなく運動体としての側面によって引き起こされたものである。問題は以上のような認識を団員がどう自覚しているかにあるが、全体を通した資料によって実際の展開をみることにする。

### 3. 普及・組織活動に現れた「前進と停滞」

その時々々の団の現状は、年に1度ないしは臨時という形で数度行われる総会によって総括されているが、40年以上にわたる歴史においては、その総会自体が開かれなかったり、十分討議が尽くされないままにいたりする時代もあった。また、団運営に責任を持つ委員会が招集されなかったり、不成立という時期もある。これは、演奏会に何人集まったとか、うたう会を何回開いたかといったような活動の指標と共に、団の状態を示しているものである。年表に示された資料や、量的に見た団員数の変化、研究生の組織の変化を基にこの状態の浮き沈みを概説すると、初期の文工隊の時期＝「どんぐり座」や「青共仙台合唱団」を名のっていた時期は、合唱団の体裁をなしていないものであったが、「正史」によって「発足」とされる1953年4月以降、団員の数で見た変化は図Ⅰ、図Ⅱに示される。(数値は総会時、56年以前は団員と研究生の区分けはできない資料：団員数の変化参照) 量的に見れば、70年代以前は特別な年度(演奏会のとりくみ)を除いて量的には少なく、演奏会を重視してきた70年代以降の活動が、団自体を大きくすることに比重を置いたものであることがわかる。現勢力を団員+研究生とした場合、数年にわたって前年との差がゼロないしマイナスという時期が4度あるので、これらを団勢力上の停滞期とし、それ以外を前進期とみた場合、その特徴は以下の通りである。

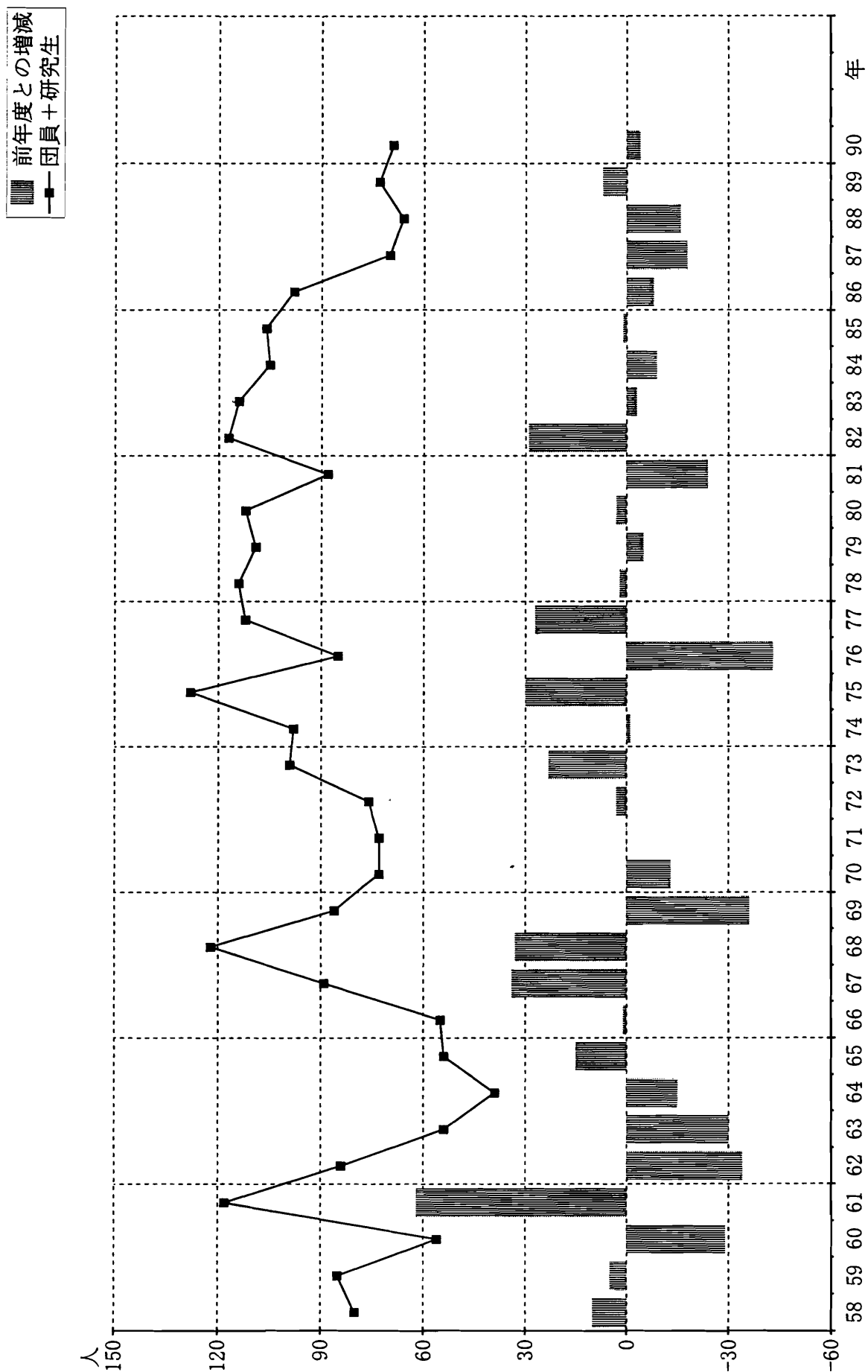
(注) また、1年だけ極端に現勢が減少する年度が3回ある。1回目は60年度であるが、

図I 団員数の変化



56年までは確認された数

図Ⅱ 団員現勢の年度別増減





総会は安保闘争が激しくなる時期の直前の3月であり、前年度に1期生から4期生までの修了演奏会をし、多くの活動家が職場に戻り、後の仙台のうたごえ協議会に参加していったことが要因となっている。そのため、団活動の停滞としては評価が下せないといえよう。2回目は76年度である。この場合は研究生組織が20名ほど減ったことと、前年の団員数では休団員が多くこの部分が整理されたことによるものが大きい。しかし、直後の第7回演奏会は66名の歌い手で前年並みの1100名を組織していること、さらに宮うた祭典（合唱発表会）には過去最高に近い38団体を組織しているところからして、停滞には当たらないといえる。3回目は81年である。これは、この年から研究生組織が20名台となっており、全体を通してみると、83年以降の停滞状況はすでに始まっていたとする見方もできる。むしろ39期生と40期生の修了率と入団率の高さが82年の現勢を1年だけ上昇させたということでもある。

#### 団員現勢（団員＋研究生数）で見た前進期と停滞期

- 1953～1955      （前進）全国での高揚第1期、総評との提携、壇上オルグ、4人の常任体制
- 1956～1957      （停滞）六全協、「巾広論」をめぐる対立、常任体制の崩壊
- 1958～1962. 6   （前進）野田委員長、国鉄祭典オルグ、綱領規約の確定、藤村専従、全国での高揚第2期、第1回演奏会
- 1962. 6～1964   （停滞）東北音楽センター維持困難、専従の請負体質、労働組合の分裂・離脱
- 1965～1969. 4   （前進）宮城のうたごえ協議会・東北のうたごえ協議会結成、宏専従、宮田・高平復団、中尾・渡辺中央講師、第2回演奏会
- 1969. 4～1971   （停滞）藤村退団、宮うた協停滞、東北のうたごえ協議会崩壊宏離脱による混乱、歌劇「沖縄」
- 1972～1982      （前進）カマラドイ、高平委員長、学うた協の結成、年1回の演奏会定着、壇上・福田・今村声楽教室、東北交流会、宮うた協再建運動
- 1983～            （停滞）高平休団、宮うた協再建、連続全国祭典、バン委員長、30周年記念演奏会、宮うた協の停滞研究生組織の減少、学うた協の崩壊、センター移転、財政赤字、東北音楽センターの結成

団資料に基づいてみられた量的な停滞と前進の時期は以上であるが、特に停滞をめぐってはいくつかの特徴を持っていることがわかる。まず第一に、運動の方向や路線をめぐる団内部での対立によって停滞が引き起こされたことはないということである。第1回目の停滞の時期、六全協や「巾広論」をめぐって壇上と谷の間での論争があったが、運動リーダーにおける方針上の対立が団を揺るがすというようなことではなかつ

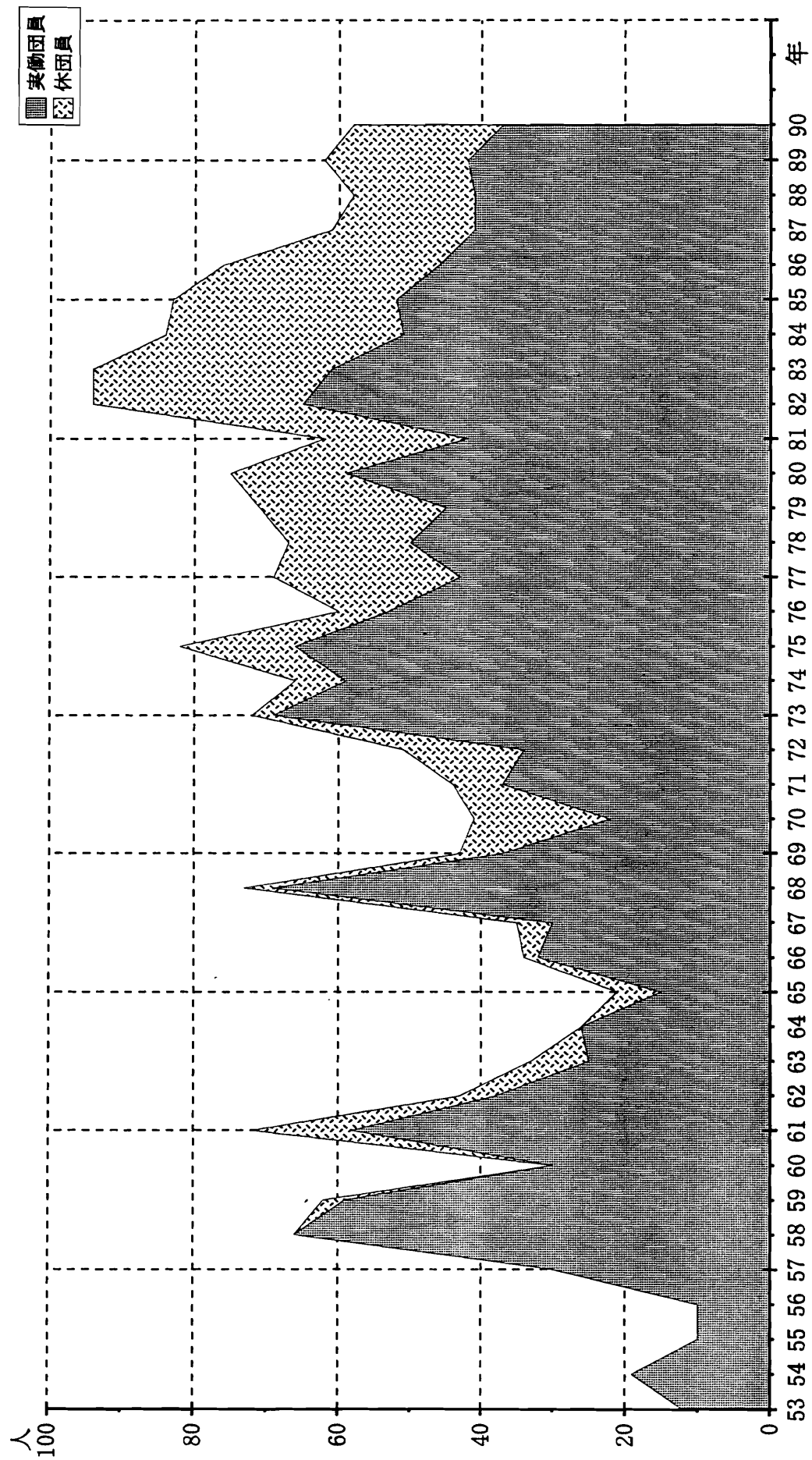
た。「文工隊」の時期にはそれによって引きずられることはあったとしても、民主的運営を核とする野田委員長以降の時代には、意見の対立が停滞を招くことはなかったといえる。1回目の停滞に関しても、大きな要因はレッスン場の確保や常任の財政問題であり、「どんぐり」や「いずみ」に見られるように、うたごえ運動のセンターとして何かが何でも仙台合唱団が必要とされていなかった事情によるところが大きい。すなわち、中心合唱団として未確立であったところが最大の原因であると考えられる。そして、それ以降も、団の路線、方針は日うた全国協議会と団結して行われていたわけであって、それを逸脱したり反対する運動論が闘わされたことはなかったのである。（70年代初頭に仙台合唱団の独自の運動があったが、それは「全国の先駆け」として後に日うた全国協議会から賞賛されたものであった。）つまり、個人間の論争や意見の相違はあったとしても、公式な団運営の中で、決定的に異なる（日本のうたごえ運動を逸脱するような）運動論が主張され、それによって分裂したり、集団で別団体を作り敵対するなどといったことはなかった。何人かの有力リーダーが団をやめて地域の合唱団の指導者になっていった事例はあるが、その合唱団も宮城のうたごえや日本のうたごえ運動に結集していたのである。

第二に、うたごえ運動自体の停滞や前進は、仙台合唱団の現勢の増減と一致しない場合があるということである。（資料：宮城のうたごえ祭典のあゆみ参照）仙台合唱団の現勢が小さい場合でも、宮城のうたごえ運動の組織化が前進していた時期は存在する。第1回目の停滞期では、「いずみ」「どんぐり」をはじめ、職場サークルなどが活躍しており、宮城のうたごえ協議会の前身となる宮城県合唱サークル協議会を41団体1020名で作り出していた。第2回目の停滞期でも、東北のうたごえ祭典が始まり、宮城の祭典も例年1000名以上を組織しており、その動きが宮城のうたごえ協議会結成につながっていったのである。また逆に、仙台合唱団が前進している時期には、宮城のうたごえ協議会が停滞している場合が多い。70年代が典型であるが、仙台合唱団の演奏会には1000名以上が組織されるのに対して、宮うた協議会組織が崩壊し、宮うた祭典がその半分以下しか組織できず、大きな赤字を出すということが繰り返されていた。両者が共に前進した時期というのは、総評が全面協力をしていた初期を除けば、60年代後半の2人専従を抱えていた一時期にすぎない。実働団員60～80名の中心合唱団において、内（団）を固めれば外（宮うた）に手が回らず、外にうって出れば内が崩壊するといった段階が克服されていたとはいえない。第2回目の停滞期のように、団自体は活動者集団でよく、外への組織化を中心に考えていればすんでいた時代（団自体の創造性があまり問題にされなかった時代）では、団が大きくなれない状態に「停滞」意識を持つ必要はさほどなかったともいえるが、70年代以降で考えるならば、それは一人一人の力量の問題として意識されざるを得なかった。

#### 4. 80年代以降の「停滞」

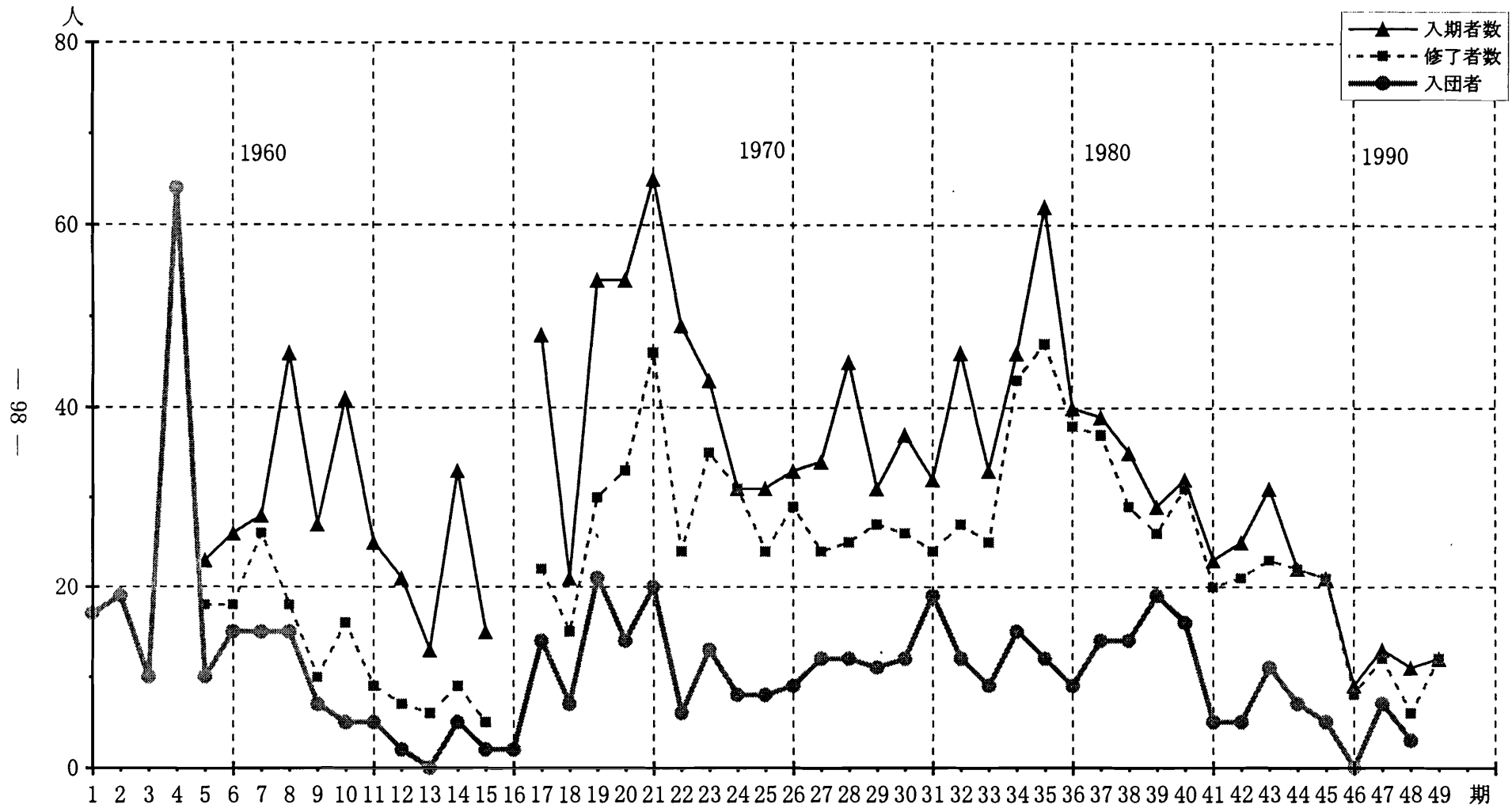
そこから第三に、80年代以降の停滞期が特別に問題にされる。この時期は、団員が

図Ⅲ 実働団員



59年までは期生も含んだ数

図Ⅳ 研究生の組織化



注……1期生から4期生までは研究生としての性格を持っていないため、確認されている入期者数をあげた。  
16期生は不明。

減少しているからといって、「一貫して停滞していた」という認識は当てはまらない。中身を詳しく見てみると、「停滞」が始まった前年の82年には現勢117名を数え、研究生の数を除けば過去最高の団員数である。（もっとも休団員が29名とかなり多く、これが80年代の特徴でもある。図Ⅲ）85年までは「停滞」でありながらも現勢100名を越しており（86年も96名）、高い位置でもってある程度安定していたともいえる。この時期、仙台合唱団は30周年記念演奏会を成功させたが、再建されたばかりの宮うた協は、3年連続産別のうたごえ全国祭典を仙台で引き受けた直後に当たり、やはり崩壊状態であった。急激に現勢が減るのは87年からである。これは事務所移転に伴う問題もあったが、なんといっても研究生組織が激減したことが大きな原因である。（図Ⅳ、資料：研究生の組織化参照）

研究生の組織化は直接に団の現勢を規定する。図で見るように、入期者、修了者、入団者数の関連には、次のような特徴がある。研究生としての性格が規定された第5期生以降、60年代の後半まで入団者はそんなに多くはなかった。入期者は多い時期はあるが修了率は高くないのが特徴である。これは地域や職場の活動家を仙台合唱団が養成していたという事情により、入団するかどうかは強く追求されなかったことも要因にあげられる。入団者が多い期生は、17期、19～21期、31期、34期、37～40期生である。60年代の後半の前進はこれによって理解されるが、70年代の前進は前半は研究生の入団者が多いというわけではないことがわかる。むしろ70年代の後半から修了率が上がっていることが特徴である。これはうたごえ運動における教育の位置づけが高まってきた事情を示している。しかるに入団者は、80年代初頭の37期から40期までがやや高いだけで、それ以外は横這いである。

すなわち、修了者が入団するかどうかは、その時々地域、職場、学園のサークルの状態（送り込まれ方）と、研究生教育の位置づけ（団に組織する意図を強く持って養成するかどうか）によって変化している。60年代は職場のサークル、70年代は地域や学園のサークルが研究生を送り込んできた。また70年代以降は、特に遅れが目立った職場のサークルを作るためにサークルの結成や再建をかけて研究生を送り込んだ職場もあった。修了時に「どちらでもがんばる」と決意したものが入団するのである。80年代になって、宮うたの各サークルが停滞してくると、サークルの基盤を持たない、全くうたごえ運動にふれたことのない青年層も研究生に飛び込んでくる比重が大きくなってきた。80年代初頭の入団者の伸びはこのことを意味しているが、彼らを「運動の担い手」として教育していくためには、特別の働きかけが必要とされていた。

研究生の激減は87年（46期生）からである。実は81年から20人台になっていたのであるが、この時期からは一桁しか集まらない状況になっていた。大きな理由として、それまで定期的に研究生を送り込んでいたサークルの停滞があげられる。量からいえば宮城のうたごえで歌い手の半分近くを占めていた学生のうたごえ協議会は、85年におたまじゃくし、やまびこの解散があり、ほぼ壊滅状態であった。もともと音楽を求めてうたごえに入ってきた学生が多かったことや、うたごえはいいが「運動」は嫌いだという傾向は以前からも指摘されていたが、学生運動の停滞とともに一方では弾圧

を受け、一方では内部分裂をしていった。職場サークルは、宮うた協に加盟している国鉄、電通はそれぞれJR、NTTに変わり、新たな条件の中での闘争が続けられていた。これは80年代の行政改革＝民営化の動きの中で、サークル員本人や家族がこれらの弾圧や分裂攻撃の渦中に入っていることであり、郵便や保母（自治体）なども同じ状況であった。うたごえの職場サークルが官公労の部分が中心であったこともあって、地域の中心合唱団の活動まで手が回らない状況に追い込まれてきたことも事実であった。「中心合唱団も自分のサークルも」というような研究生対象者が見つけにくくなっていたのである。さらに、同期の研究生のほとんどが、運動に関しては未経験者で量的にも少ないといった場合、「学びあい」があまり力を発揮しないという欠点もあろう。少なくとも、生き生きとした合唱活動には、外へと普及・組織ができる魅力的な人材を必要としたが、必要とされた力は、入団したばかりの経験のない新団員では困難であることは言うまでもない。

すなわち、この時点で初めて、仙台合唱団と宮城のうたごえが両方とも停滞するという事態を迎えたのである。特に、80年代後半以降の停滞期の特徴はここにある。それ以前であれば、仙台合唱団の停滞に対しては中央からの援助（中央合唱団などの公演を企画するとか、日うた全国協の幹部、音楽家のレッスンを含む指導など）で何度か立ち直ってきた。その裏には中心合唱団を支えようとする宮城のうたごえ各サークルが存在し、人的、物的に支援を送ってきたという事実を見落としてはいけない。またその逆に、仙台合唱団が宮城の運動を掘り起こしていったことは誰しもが認めることであり、両者とも停滞するという事態は回避されていたのである。

この時期、歴史が繰り返すかのように再び宮うた協も再建された。再建の中心は、職場といっても単一ではない医療関係労働者を集めた医療のうたごえセデス、全国祭典を控えた電通モーニングコール、民営化での裁判闘争を抱えていたD51合唱団、合唱組曲を歌うことによって組織された「母さんの樹」合唱団であった。D51合唱団を除いてはできて間もないサークルであるし、当のD51はJR移行に関して職場の分裂、分断という攻撃のまっただ中にあった。第1、第2、第3の停滞期に見られるような地域の状況ではなかった。まさに、戦後第2の反動期であった。第1の反動期には、活動家が弾圧されても一般のサークル員がそれを補う以上の大衆的な運動を巻き起こして、その困難を突破していった。しかるにこの時点の職場サークルは、50年代とは違って「たたかうサークル」に成長していたが、広範な大衆との結合という意味では基盤が弱く、困難な中でもうたごえの旗を守っている活動家集団といった状況であった。大衆的に突破するという条件は不足していた。

80年代以降の仙台合唱団の運動は、前に述べたとおり、全国と連帯してその方針を実践すべく努力を重ねてきた。井上頼豊の指摘にあったような、「うたで広げ、うたで組織する」という方向に沿って、「永遠のみどり」「自由なる朝へ」「母さんの樹」「地の道・天の道」「おおブナの森よ」「クマゲラの夏」「東北造船ミュージカル」など、「〇〇を歌う合唱団」を組織し、運動を展開していった。（資料：仙台合唱団演奏会、日うた祭典宮城の発表 参照）職場と地域の連帯が、闘いの展望を示すということがより

はっきりとなってきた中において、以上の方向は両者の共同・連帯の力を作り出すものとして取り組まれていったのである。しかし、それは仙台合唱団が「中心」となって引っ張っていったというよりも、地域や職場の各団体個人が「うた」のもとに結集して自分たちの運動を作り出していくという姿であった。「うたでつなぐ」という立場が明確に打ち立てられなければ、中心合唱団の役割は「発起人」か「パートリーダー」の位置になってしまうものであった。「うたで広げ、うたで組織する」とは、うたが勝手に運動を広げてくれるというわけではない。うたを作り出し、それを普及する人々が必要である。作り出し方があり、普及の仕方がある。イベントの成功と合唱団の前進は同じではない。

そうであるならば、宮城の各サークルがこの時期に強力な地域の中心合唱団を必要としていたのかどうか、言葉を換えれば、どのような中心合唱団が求められていたのかが問われねばならない。90年代に至って、団員の志向としては仙台合唱団に集結するよりも自分のサークルの側に立ち、従来の中心合唱団の機能が各サークルに分かれたような状態が見られた。仙台合唱団も宮うた協も両者が停滞を見せていた時期には、「中心合唱団の中心性」は深められない傾向、それは強力な中心合唱団が求められなかったということになる。「理念や思想の普及」という「内容」に関する課題ではなく、「うたで普及」という「方法」にウェイトがおかれた場合、以上のような弱点があることに注意が必要である。

## 5. うたごえ運動の「前進」について

どうすれば前進するのかは本研究の課題ではない。それはまさに実践的な課題として、実践の中で検討され総括されていくものである。仙台合唱団においても、60年代、70年代の前進は、全国の運動の中で総括され提起された活動を展開する中で実現されていったものであった。そのためには、これら全国的な運動の教訓を学ぶと共に、それを具体的な地域で実践していくための方法を作り出す作業が必要であろう。ここでは最後に、特に地域的運動形態を作り出す課題において、運動の歴史が示している点について整理することにする。

地域うたごえ運動は、他の大衆運動にはできない独自の特徴を持っている。資料の年表で示しておいたように、仙台合唱団の活動の歴史はまさに地域の闘いの歴史でもあることがわかる。職場の労働条件改善（ストライキ支援や弾圧反対など労働運動）ばかりではなく、平和（原水禁、安保闘争、インドシナ人民支援、基地撤去など）、人権（自由と民主主義を守る運動、松川事件、松山事件、大須事件など）、教育（私学助成、教科書裁判、大学民主化、子どもを守る運動など）、婦人解放（母親運動、保育所づくり運動、差別撤廃運動など）、福祉（障害者運動、医療問題など）、地域環境（自然保護運動、開発反対闘争、地場産業を守る運動など）等、地域におけるありとあらゆる闘いに参加し、事柄のまっただ中に自分をおいて運動を繰り広げてきた。また時には、子ども祭、市民祭、町内会との協力などコミュニティづくりにも参加してきたし、地

域自治体の革新や政治の革新についても積極的に行動してきた。しかも、「うた」という大量の人々に一気に伝達・普及する事のできる武器を持ち、運動を進めてきたのである。このような大衆運動はほかにはない。

様々な大衆運動、社会運動が存在しているが、上記の意味で、うたごえ運動には他の運動によってはとって変わることのできない独自の側面があり、運動の前進におけるこの側面の意義を問題にする必要があるだろう。一言でいえば、地域で起きている様々な運動（闘い）に対して、それらの関連を見いだしつなげていくことによって、それぞれの闘いを前進させると同時に地域全体を変えていく、いわば地域づくり（変革）運動の最先端を担っているということである。問題は地域うたごえ運動自身がそのことを自覚しているかにある。

実は、うたごえ運動の3つの基本理念はそのことを指し示していたのではなかっただろうか。「一人が一人をさそう運動」これは、地域における市民運動全般に当てはまる原則である。たとえその団体が革新的であろうがなかろうが、「身分的中間団体から解放された個人」（樋口陽一『自由と国家』岩波新書、1989年）が作り出す運動を目指すということである。地域の集団（労働組合や政党も含めて）に埋没するのではなく、一人一人の主体性が問題になることである。「自立した個人」による運動、あるいはそういう個人や主体性を運動が作り出すことである。まさに、地域に生きる人間の「抑圧からの解放」の課題を含む原則であろう。

次の「うたごえは平和の力」、これは平和というものが全人類的課題であると同時に、地域においては何人にも無視することはできない住民自治の条件となっていることがあげられる。90年代の地域づくりをめぐるっては、政策に迎合して地域の主体性を失うのではなく、住民自治に依拠したものこそが求められてきた。そしてその条件として、「大企業の民主的規制」や「分権と地方自治の確立」という原則のほかに、大前提として「平和であること」の重要性が指摘されていた。（保母武彦「内発的發展論」宮本憲一他編『地域経済学』有斐閣 所収、1990年）米軍基地問題やNLP問題など、平和でない状況こそが民主主義や地方自治の制限となっているからである。平和な歌を歌えば平和がくるのではなく、うたごえは地域の中で平和を創り出そうとする人々の力になる（うたによってその運動を励ます、勇気を与える）運動だということである。

3つ目の「うたは闘いととも」これは具体的な地域の闘いの中でうたが求められているということだけではなく、うたによって闘いをさらに組織するということを示している。「求められているところにうって出る」というのは運動の歴史が示していた前進のためのスタイルであるが、低成長期以降の地域での闘いは、それぞれの個別の闘いが構造化され、勝利の条件も全体構造自体を問題にすることが求められてきた。それぞれの問題（労働問題、農業問題、環境問題、教育問題……）が、内部での関連を持ち、全体を変えることによって個別の課題も解決するという「綱領的要求」へと発展してきたことが特徴である。地域での問題・矛盾も、地域の中だけではなく、中央との関係という大きな課題の中で語られるようになり、闘いの展望はこの「縦」の関係を変えるための「横」の関係の地域的変革が求められるようになってきている。（河



相一成・星埜淳編『地域再構成の展望』中央法規出版、1991年 参照) 闘いと闘いをつなぎ、事柄の本質に迫る大きな闘いに発展させること、このような闘いを組織していく中で、「うた」も大きく発展するということを示しているといえよう。

地域の中心合唱団が全国の課題を地域で闘うと同時に、以上のような課題を地域的課題として受けとめ、外に向かって積極的にうって出ていったときに、広範な大衆の支持・結合をつくりだしてきた。仙台合唱団が、サークル構造の展開として、60年代の「専従型」や70年代の「音楽型」(これらにはそれぞれを代表する「人物」の歴史という側面でもとらえられるが) という時代を経て、「うたで組織する」といった80年代以降の方向を歩むならば、前記の特に3つ目の点を認識する必要があるだろう。第1、第2の点も達成されているとは思えないが、「人物史」ととらわれないサークルの歴史を生み出すためには必要な条件であると考ええる。その役割を果たしていなければ、「地域の」中心合唱団が強力に求められなくなってしまうということが、実践的にも示されているのではないか。

さらに、若い研究生を育て、運動の担い手にしていくという課題に関して、運動の意義と任務は「全国情勢」や「音楽芸術」という抽象的なものでしか語られない場合、教育はなかなか成功していかなかった。教育内容は以上のことであっても、自分達の足下にある状況の変革をめざす教育形態が意図的に探られたとき、「いきいきと積極的にレッスンし歌う」活動が展開できたのではなかったか。若い団員が積極的に運動の担い手に成長すること、これは運動前進のために不可欠のことではあるが、「意義と任務の自覚」「音楽的に感動」といった動因のほかに、「自分自身がうたによって励まされること」を指摘しておきたい。自分を励ませないような歌や歌い方が他人を励ませるはずがない。運動に積極的に加わることによって成長すること、これはうたごえ運動の場合やはりうたを通してでなければ本当とはいえない。そこには抽象的ではなくて、具体的に地域で生きている自分の存在を確かめながら、自分の成長の課題として行われるものである。そのような、自分自身を含む地域での闘いを考慮に入れた地域的教育形態が必要といえるだろう。宮城のうたごえの歴史の中に登場してきた「どんぐり」や「いずみ」、そして「仙音アコール」などの地域サークルと比較して、仙台合唱団は決定的に違った位置を占めている。地域の中で様々な闘いが存在し、人々がその勝利を地域社会の発展と関連づけて願っている限り、地域の中心合唱団が「終焉」する事はないのである。